

死者の書

折口信夫

青空文庫

彼の人の眠りは、徐かに覚めて行つた。まつ黒い夜の中に、更に冷え圧するものの澱よどんでいるなかに、目のあいて来るのを、覚えただのである。

した　した　した。耳に伝うように来るのは、水の垂れる音か。ただ凍りつくような暗闇の中で、おのずと睫まつげと睫とが離れて来る。膝ひざが、肱ひじが、徐おもむろに埋れていた感覚をとり戻して来るらしく、彼の人の頭に響いて居るもの――。全身にこわばった筋が、僅かな響きを立てて、掌・足の裏に到るまで、ひきつれを起しかけてい

るのだ。

そうして、なお深い闇。ぼつちりと目をあいて見廻す瞳に、まずあつ圧しかかる黒い巖いわおの天井を意識した。次いで、氷になった岩牀いわどこ。両脇に垂れさがる荒石の壁。したしたと、岩伝いずくう雫の音。

時がたった——。眠りの深さが、はじめて頭に浮んで来る。長い眠りであった。けれども亦、浅い夢ばかりを見続けて居た気がする。うつらうつら思っていた考えが、現実つながらに繋つて、ありありと、目に沁しみついていようである。

ああ耳面みみもの刀自とじ。

よみがえ甦よみがえった語が、彼の人の記憶を、更に弾力あるものに、響き返した。

耳面刀自。おれはまだお前を……思っている。おれはきのう、

ここに来たのではない。それも、おとといや、其さきの日、ここに眠りこけたのでは、決してないのだ。おれは、もつともつと長く寝て居た。でも、おれはまだ、お前を思い続けて居たぞ。耳面刀自。ここに来る前から……ここに寝ても、……其から覚めた今まで、一続きに、一つ事を考えつめて居るのだ。

古い——祖先以来そうしたように、此世に在る間そう暮して居た——習しからである。彼の人は、のくつと起き直ろうとした。だが、筋々が断れるほどの痛みを感じた。骨の節々の挫けるような疼きを覚えた。……そうして尚、じつと、——じつとして居る。射干玉ぬばたまの闇。黒玉の大きな石壁に、刻み込まれた白々としたからだの様に、厳かに、だが、すんなりと、手を伸べたままで居た。

耳面刀自の記憶。ただ其だけの深い凝結した記憶。其が次第に蔓ひろがつて、過ぎた日の様々な姿を、短い聯想れんそうの紐ひもに貫いて行く。そうして明るい意思が、彼の人の死枯しにがれたからだに、再立ふたたびち直つて来た。

耳面刀自。おれが見たのは、唯一目——唯一度だ。だが、おまえのことを聞きわたった年月は、久しかった。おれによつて来い。耳面刀自。

記憶の裏から、反省に似たものが浮び出て来た。

おれは、このおれは、何処どこに居るのだ。……それから、ここは何処どこなのだ。其よりも第一、此おれは誰たれなのだ。其をすつかり、おれは忘れた。

だが、待てよ。おれは覚えて居る。あの時だ。鴨が声を聞いたのだつけ。そうだ。訳語田の家を引き出されて、磐余の池に行った。堤の上には、遠捲きに人が一ぱい。あしこの萱原、そのこの矮叢から、首が突き出て居た。皆が、大きな喚び声を、挙げて居たつけな。あの声は残らず、おれをいとしがって居る、半泣きの喚き声だったのだ。其でもおれの心は、澄みきって居た。まるで、池の水だった。あれは、秋だったものな。はつきり聞いたのが、水の上に浮いている鴨鳥の声だった。今思うと——待てよ。其は何だか一目惚れの女の哭声だった気がする。——おお、あれが耳面刀自だ。其瞬間、肉体と一つに、おれの心は、急に締めあげられるような刹那を、通った気がした。俄

かに、楽な広々とした世間に、出たような感じが来た。そうして、ほんの暫らく、ふつとそう考えたきりで……、空も見ぬ、土も見ぬ、花や、木の色も消え去った——おれ自分すら、おれが何だか、ちつとも訣らぬ世界のものになつてしまつたのだ。

ああ、其時きり、おれ自身、このおれを、忘れてしまつたのだ。足の踝くるぶしが、膝ひづかの膕かみが、腰のつがいが、頸くびのつけ根が、顛こめかみ顛かみが、ほんの窪くぼが——と、段々上つて来るひよめきの為に蠢うごめいた。自然に、ほんの偶然強こわばつたままの膝かが、折かり屈かめられた。だが、依然として——常闇とこやみ。

おおそうだ。伊勢の国に居られる貴い巫女みこ——おれの姉御。あのお人が、おれを呼び活いけに来てゐる。

姉御。ここだ。でもおまえさまは、尊い御神おんかみに仕えている人だ。おれのからだに、触つてはならない。そこに居るのだ。じつとそこに、踏み止とまつて居るのだ。——ああおれは、死んでゐる。死んだ。殺されたのだ。——忘れて居た。そうだ。此は、おれの墓だ。

いけない。そこを開けては。塚の通い路の、扉をこじるのはおよし。……よせ。よさないか。姉の馬鹿。

なあんだ。誰も、来ては居なかつたのだな。ああよかった。おれのからだだが、天日てんぴに暴さらされて、見る見る、腐るところだった。だが、おかしいぞ。こうつと——あれは昔だ。あのこじあける音がするのも、昔だ。姉御の声で、塚道の扉を叩きながら、言

つて居たのも今の事——だったと思うのだが。昔だ。

おれのここへ来て、間もないことだった。おれは知っていた。

十月だったから、鴨が鳴いて居たのだ。其鴨みたいに、首を捻

じちぎられて、何も訣らぬものになったことも。こうつと——

姉御が、墓の戸で哭き喚いて、歌をうたいあげられたつけ。

「巖岩の上に生ふる馬酔木を」と聞えたので、ふと、冬が過ぎ

て、春も闌け初めた頃だと知った。おれの骸が、もう半分融け

出した時分だった。そのあと、「たをらめど……見すべき君が

ありと言はなくて」。そう言われたので、はつきりもう、死ん

だ人間になった、と感じたのだ。……其時、手で、今してる様

にさわって見たら、驚いたことに、おれのからだは、著こんだ

著物の下で、ほじし 腊のように、ペしやんこになつて居た——。

かいな 臂が動き出した。片手は、まつくらな空をさした。そうして、今一方は、そのまま、いわどこ 岩牀の上を掻き搜つて居る。

うつそみの人なる我や。明日よりは、ふたかみやま 二上山を愛兄弟と思

はむ

なきうた 誄歌が聞えて来たのだ。姉御があきらめないで、も一つつぎ足して、歌つてくれたのだ。其で知つたのは、おれの墓と言うものが、二上山の上にある、と言うことだ。

よい姉御だった。併し、其歌の後で、又おれは、何もわからぬものになつてしまった。

其から、どれほどたったのかなあ。どうもよつぽど、長い間だ

った気がする。伊勢の巫女様、尊い姉御が来てくれたのは、居睡りの夢を醒さまされた感じだった。其に比べると、今度は深い睡りの後見あとたいな気がする。あの音がしてる。昔の音が――。

手にとるようだ。目に見るようだ。心を鎮めて――。鎮めて。でない、この考えが、復散またらかつて行つてしまふ。おれの昔が、ありありと訣つて来た。だが待てよ。……其にしても一体、ここに居るおれは、だれなのだ。だれの子なのだ。だれの夫つまなのだ。其をおれは、忘れてしまつて居るのだ。

両の臂は、頸の廻り、胸の上、腰から膝をまさぐつて居る。そうしてまるで、生き物のするような、深い溜ため息いきが洩もれて出た。

大変だ。おれの著物は、もうすっかり朽くつて居る。おれの禪はかまは、

ほこりになって飛んで行つた。どうしろ、と云うのだ。此おれは、著物もなしに、寝て居るのだ。

筋ばしるように、彼の人のからだに、血の馳^かけ廻るに似たものが、過ぎた。肱^{ひじ}を支えて、上半身が闇の中に起き上つた。

おお寒い。おれを、どうしろと仰^{おつしや}るのだ。尊いおつかさま。おれが悪かつたと言ふのなら、あやまります。著物を下さい。著物を――。おれのからだは、地べたに凍りついてしまいます。

彼の人には、声であつた。だが、声でないものとして、消えてしまった。声でない語^{ことば}が、何時までも続いている。

くれる。おつかさま。著物がなくなつた。すつぱだか出て来た赤ん坊になりたいぞ。赤ん坊だ。おれは。こんなに、寢床の

上を這いずり廻っているのが、だれにも訣らぬのか。こんなに、手足をばたばたやっているおれの、見える奴が居ぬのか。

その唸うめき声のとおり、彼の人の骸は、まるでだだをこねる赤子のように、足もあががに、身あがきをば、くり返して居る。明りのささなかつた墓穴の中が、時を経て、薄い氷の膜ほど透けてきて、物のたたずまいを、幾分臃おぼろに、見わけることが出来るようになって来た。どこからか、月光とも思える薄あかりが、さし入って来たのである。

どうしよう。どうしよう。おれは。——大刀までこんなに、錆さびついてしまった……。

月は、依然として照つて居た。山が高いので、光りにあたるものが少かつた。山を照し、谷を輝かして、剩る光りは、又空に跳ね返つて、残る隈々までも、鮮やかにうつし出した。

足もとには、沢山の峰があつた。黒ずんで見える峰々が、入りくみ、絡みあつて、深々と畝つてゐる。其が見えたり隠れたりするのは、この夜更けになつて、俄かに出て来た霞の所為だ。其が又、此冴えざえとした月夜をほつとりと、暖かく感じさせて居る。

広い端山の群つた先は、白い砂の光る河原だ。目の下遠く続いた、輝く大佩帯は、石川である。その南北に涉つてゐる長い光りの筋

が、北の端で急に広がって見えるのは、おおしこうち凡河内の邑のあたりで

あろう。其へ、やまあい山間を出たばかりの堅かたしお塩川―大和川―が落ち

あつて居るのだ。そこから、いぬい乾の方へ、光りを照り返す平面が、

幾つも列つらなつて見えるのは、くさかえ日下江・ながせえ永瀬江・なにわえ難波江などの水面で

あろう。

しず寂かな夜である。やがて鶏鳴近い山の姿は、一様に露に濡れたよ

うに、しっとりとして静まって居る。谷にちらちらする雪のよう

な輝きは、目の下の山田谷に多い、小桜の遅れ咲きである。

一本の路が、真直に通っている。二上山の男おのかみ岳・女めのかみ岳の間か

ら、急に降さがつて来るのである。難波から飛鳥あすかの都への古い間道な

ので、日によつては、昼は相応な人通りがある。道は白々と広く、

夜目には、芝草の蔓はつて居るのすら見える。当麻路たぎまじである。一ひとく
 降りだして又、大降りおおくだにかかろうとする処が、中だるみに、や
 やひらた坦くなつていた。梢とがの尖つた栢かえの木の森。半世紀を経た位の木
 ぶりごうばが、一様に揃つて見える。月の光りも薄い木陰全体が、勾
 配いを背負つて造られた円塚であつた。月は、瞬きもせずこに照し、
 山々は、深くまぶた暁を閉じている。

こう　　こう　　こう。

先刻さつきから、聞えて居たのかも知れぬ。あまり寂しずけさに馴れた耳は、
 新たな声を聞きつけよう、としなかつたのであろう。だから、今珍
 しく響いて来た感じもないのだ。

こう　　こう　　こう——こう　　こう　　こう。

確かに人声である。鳥の夜声とは、はつきりかわつた韻を曳いて来る。声は、暫らく止んだ。静寂は以前に増し、冴え返つて張りきっている。この山の峰つづきに見えるのは、南に幾重ともなく重つた、葛城かつらぎの峰々である。伏越ふしごえ・櫛羅くしら・小巨勢こごせと段々高まつて、果ては空の中につき入りそうに、二上山と、この塚にのしかかるほど、真黒に立ちつづいている。

当麻路をこちらへ降つて来るらしい影が、見え出した。二つ三つ五つ……八つ九つ。九人の姿である。急な降りを一気に、この河内路へ馳かけおりて来る。

九人と言うよりは、九柱の神であつた。白い著物きもの・白い鬘かざら、手は、足は、すべて旅の装束いでたちである。頭より上に出た杖をついて――。

この垣たいらに来て、森の前に立った。

こう　　こう　　こう。

誰の口からともなく、一時に出た叫びである。山々のこだまは、驚いて一様に、忙しく声を合せた。だが、山は、忽たちまち一時の騒そうじよ擾うから、元の緘黙しじまに戻つてしまった。

こう。こう。お出でなされ。藤原南家郎女なんけいらつめの御魂みたま。

こんな奥山に、迷うて居るものではない。早く、もとの身に戻れ。こう　　こう。

お身さまの魂を、今、山たずね尋ねて、尋ねあてたおれたちぞよ。こう　　こう　　こう。

九つの杖びとは、心から神になつて居る。彼らは、杖を地に置き、

鬘を解いた。鬘は此時、唯真白な布に過ぎなかつた。其を、長さの限り振り捌さばいて、一様に塚に向けて振った。

こう　　こう　　こう。

こう言う動作をくり返して居る間に、自然な感情の鬱うつくつ屈と、休息を欲するからだの疲れとが、九体の神の心を、人間に返した。彼らは見る間に、白い布を頭に捲まきこんで鬘とし、杖を手にとつた旅人として、立っていた。

おい。無言しじまの勤めも此までじや。

おお。

八つの声が答えて、彼等は訓練せられた所作のように、忽一度に、草の上に寛くつろぎ、再杖を横えた。

これで大和も、河内との境じやで、もう魂ごいの行もすんだ。
今時分は、郎女さまのからだは、廬いおりの中で魂をとり返して、ぴちぴちして居られようぞ。

ここは、何処だいの。

知らぬかいよ。大和にとつては大和の国、河内にとつては河内の国おおぜきの大関。二上の当麻路の関――。

別の長老とねめいた者が、説明を続ついだ。

四五十年あとまでは、唯関と言うばかりで、何の標しるしもなかった。其があつた、近江の滋賀の宮に馴染み深かつた、其よ。大和では磯城しきの訳語田おさだの御館みたちに居られたお方。池上の堤で命召されたあのお方の骸むくろを、罪人に殯もがりするは、災の元と、天若日子あめわかひこの昔語り

に任せて、其まま此処にお搬はこびなされて、お埋いけになつたのが、
此塚よ。

以前の声が、もう一層皺しわがれた響きで、話をひきとつた。

其時の仰せには、罪人よ。吾子わこよ。吾子の為しおほせなんだ荒あらび心
で、吾子よりももつと、わるい猛たけび心を持った者の、大和に來
向うのを、待ち押え、塞さえ防いで居ろ、と仰せられた。

ほんに、あの頃は、まだおれたちも、壮盛わかざかりじやつたに。今
ではもう、五十年昔になるげな。

今一人が、相談でもしかける様な、口ぶりを挿んだ。

さいや。あの時も、墓作りに雇われた。その後も、当麻路の修
覆に召し出された。此お墓の事は、よく知って居る。ほんの苗

木じやつた栢が、此ほどの森になつたものな。畏こわかつたぞよ。
此墓のみ魂が、河内安宿部あすかべから石担いしもちに来て居た男に、憑ついた
時はのう。

九人は、完全に現うつし世よの庶民の心に、なり還かえつて居た。山の上は、
昔語りするには、あまり寂しいことを忘れて居たのである。時の
更け過ぎた事が、彼等の心には、現実にひしひしと、感じられ出
したのだらう。

もう此でよい。戻ろうや。

よかろ よかろ。

皆は、鬢をほどき、杖を棄てた白衣の修道者、と言うだけの姿なりに
なつた。

だかの。皆も知つてようが、このお塚は、由緒深い、氣のおける処ゆえ、もう一度、魂ごいをしておくまいか。

長老の語と共に、修道者たちは、再魂たまよば呼よいの行を初めたのである。

こう　こう　こう。

おお……。

異様な声を出すものだ、と初めは誰も、自分らの中の一人を疑い、其でも變に、おじけづいた心を持ちかけていた。も一度、

こう　こう　こう。

其時、塚穴の深い奥から、氷こおりきつた、而も今息を吹き返したば

かりの声が、明らかに和したのである。

おおう……。。

九人の心は、ばらばらの九人の心々であつた。からだも亦ちりぢりに、山田谷へ、竹内谷へ、大阪越えへ、又当麻路へ、峰にちぎれた白い雲のように、消えてしまった。

唯畳まった山と、谷とに響いて、一つの声ばかりがする。

おおう……。。

三

万法蔵院の北の山陰に、昔から小な庵あん室しつがあつた。昔からと言

うのは、村人がすべて、そう信じて居たのである。荒廃すれば繕い繕いして、人は住まぬ廬に、くじやくみようおうぞう孔雀明王像が据えてあつた。当麻の村人の中には、まれ稀に、此が山田寺である、と言うものもあつた。そう言う人の伝えでは、方法蔵院は、山田寺の荒れて後、飛鳥の宮の仰せを受けてとも言い、又御自身の御発起からだとも言うが、一人の尊いみ子が、昔の地を占めにお出でなされて、大伽藍いがらんを建てさせられた。其際、山田寺の旧構を残すため、寺の四至の中、北の隅へ、当時立ち朽くさりになつて居た堂を移し、規模を小さくして造られたもの、と伝え言うのであつた。そう言えば、山田寺は、えのきみおづぬ役君小角が、山林仏教を創はじめる最初の足代あししろになつた処だと言う伝えが、吉野や、葛城の山伏やまぶしぎ行人ようじんの間に行われ

ていた。何しろ、万法蔵院の大伽藍が焼けて百年、荒野の道場と
なつて居た、目と鼻との間に、こんな古い建て物が、残つて居た
と言うのも、不思議なことである。

夜は、もう更けて居た。谷川の激たぎちの音が、段々高まつて来る。

二上山の二つの峰の間から、流れくだる水なのだ。

廬の中は、暗かつた。炬を焚たくことの少い此辺では、地下百じげ姓は、

夜は真暗な中で、寝たり、坐つたりしているのだ。でもここには、
本尊まつが祀つてあつた。夜を守つて、仏の前で起き明す為には、御み

あかし
灯を照した。

孔雀明王の姿が、あるかないかに、ちろめく光りである。

姫は寝ることを忘れたように、坐つて居た。

万法蔵院の上座の僧そうじゆう綱つなたちの考えでは、まず奈良へ使いを出さ

ねばならぬ。横よこ佩は家けの人々の心を、思うたのである。次には、

女にょ人にん結けつ界けがいを犯して、境内深く這はい入いった罪は、郎いらつめ女にょ自身あがなに贖

わさねばならなかつた。落慶のあつたばかりの淨域だけに、一時

は、塔たつちゆう頭とう塔頭の人たちの、青くなつたのも、道理である。此

は、財物を施入する、と謂いつたぐらいではすまされぬ。長期の物

忌みを、寺近くに居て果させねばならぬと思つた。其で、今日昼

の程、奈良へ向つて、早使いを出して、郎女の姿が、寺中に現れ

たゆくたてを、仔細しさいに告げてやつたのである。

其と共に姫の身は、此庵あん室しつに暫らく留め置かれることになつた。

たとひ、都からの迎えが来ても、結界を越えた贖いを果す日数だ

けは、ここに居させよう、と言うのである。

牀ゆかは低いけれども、かいてあるにはあつた。其替り、天井は無むしよ

上うに高くて、而も萱かやのそそけた屋根は、破風はふの脇から、むき出

しに、空の星が見えた。風が唸うなつて過ぎたと思つと、其高い隙か

ら、どつと吹き込んで来た。ばらばら落ちかかるのは、煤すすがこぼ

れるのだらう。明王の前の灯が、一いつとき時かつと明るくなつた。

その光りで照し出されたのは、あさましく荒すさんだ座敷だけでなか

つた。荒板の牀の上に、薦こもむしろ筵じか二枚重ねた姫の座席。其に向つ

て、ずっと離れた壁ぎわに、板敷じかに直じかに坐つて居る老婆の姿があ

つた。

壁と言うよりは、壁かべしろ代であつた。天井から吊りさげた豎たつごも薦こもが、

幾枚も幾枚も、ちぐはぐに重つて居て、どうやら、風は防ぐようになつて居る。その壁代に張りついたように坐つて居る女、先からしわぶき嗽一つせぬ静けさである。貴族の家の郎女は、一日もの言わずとも、寂しいとも思わぬ習慣がついて居た。其で、この山陰の一つ家に居ても、溜め息たいき一つ洩すのではなかつた。昼ひの内此処へ送りこまれた時、一人の姥うばのついて来たことは、知つて居た。だが、あまり長く音も立たなかつたので、人の居ることは忘れて居た。今ふつと明るくなつた御灯みあかしの色で、その姥の姿から、顔まで一目で見た。どこやら、覚えのある人の気がする。さすがに、姫にも人懐しかった。ようべ家を出てから、女にょしょう性には、一人も逢つて居ない。今そこに居る姥が、何だか、昔の知り人のよう

に感じられたのも、無理はないのである。見覚えのあるように感じたのは、だが、其親しみ故だけではなかつた。

郎女さま。

緘黙しじまを破つて、却かえつてももの寂しい、乾声からごえが響いた。

郎女は、御存じおざるまい。でも、聴いて見る気はおありかえ。お生れなさらぬ前の世からのことを。それを知つた姥でおざるがや。

一旦、口がほぐれると、老女は止めどなく、喋りしゃべ出した。姫は、この姥の顔に見知りのある氣のした訣わけを、悟りはじめて居た。藤原南家にも、常々、此年よりとおなじような媪おむなが、出入りして居た。郎女たちの居る女部屋までも、何時もずかずか這入つて来て、

はばか

憚りなく古物語りを語った、あの中臣志斐姫なかとみのしいのおむな——。あれと、

おなじ表情をして居る。其も、尤もつともであつた。志斐老女が、藤とうし氏の

語部の一人であるように、此も亦、この当麻たぎまの村の旧族、当麻真

人の「氏の語部」、亡び残りの一人であつたのである。

藤原のお家が、今は、四筋に分れて居ります。じゃが、大たいし

織よくかん冠かんさまの代どころでは、ありは致しませぬ。淡海公の時

も、まだ一流れのお家でおざりました。併し其頃やはり、藤原

は、中臣と二つの筋に岐わかれました。中臣の氏人で、藤原の里に

栄えられたのが、藤原と、家名の申され初めておざりました。

藤原のお流れ。今ゆく先も、公家くげしやうろく撰録の家柄。中臣の筋や、

おん神仕え。差別けじめけじめ差別明らかに、御代みよみよ御代の宮守みやまもり。じゃが、

今は今、昔は昔でおざります。藤原の遠つ祖おや、中臣の氏の神、
 天押雲根あめのおしくもねと申されるお方の事は、お聞き及びかえ。

今、奈良の宮におざります日の御子さま。其前は、藤原の宮の
 日のみ子さま。又其前は、飛鳥の宮の日のみ子さま。大和の国く
 中になかに、宮遷うつし、宮奠さだめ遊よした代々の日のみ子さま。長く久し
 い御代御代に仕えた、中臣の家の神業。郎女さま。お聞き及び
 かえ。遠い代の昔語り。耳明らめてお聴きなされ。中臣・藤原
 の遠つ祖あめの押雲根命おしくもね。遠い昔の日のみ子さまのお喰めしの、
 飯いと、み酒きを作る御料の水を、大和國中残くまる隈なく捜もとし覓めま
 した。

その頃、国原の水は、水洩そぶ臭く、土濁りして、日のみ子さまの

お喰しの料しろうに叶いません。天の神高天たかまの大御祖おおみおや教え給えと祈ろうにも、国中は国低し。山々もまんだ天遠し。大和の国とり囲む青垣山では、この二上山。空行く雲の通り路と、昇り立つて祈りました。その時、高天の大御祖のお示しで、中臣の祖押雲根命、天の水の湧き口を、此二上山やに八とところまで見とどけて、其後久しく、日のみ子さまのおめしの湯水は、代々の中臣自身、此山へ汲みに参ります。お聞き及びかえ。

当麻真人の、氏の物語りである。そうして其が、中臣の神わざと繋つなりのある点を、座談のように語り進んだ姥は、ふと口をつぐんだ。外には、瀬音が荒れて聞えている。中臣・藤原の遠祖が、天あめのふたかみめに求めた天八井あめのやいの水を集めて、峰を流れ降り、岩にあ

二一上

たつて漲りみなぎ激つ川なのであろう。瀬音のする方に向いて、姫は、
たなそこ掌を合せた。

併しやがて、ふり向いて、仄ほのぐら暗くさし寄つて来ている姥の姿を
 見た時、言おうようない畏おそろしさと、せつかれるような忙しさを、
 一つに感じたのである。其に、志斐姥の、本式に物語りをする時
 の表情が、此老女の顔にも現れていた。今、当麻の語部の姥は、
かみがか神憑りに入るらしく、わなわな震いはじめて居るのである。

四

ひさかたの

あめふたかみ
 天二上に、

我が登り

見れば、

とぶとりの

明日香

ふる里の

神南備山隠り、

家どころ

多に見え、

豊にし

屋庭は見ゆ。

弥彼方に

見ゆる家群

藤原の

朝臣が宿。

遠々に

我が見るものを、

たか／＼に

我が待つものを、

処女子は

出で通ぬものか。

よき耳を

聞かさぬものか。

青馬の

耳み面もの刀と自じ。

刀自もがも。

女おと弟もがも。

その子の

はらからの子の

処女子の

一人

一人だに、

わが配つ偶まにこ来よ。

ひさかたの

天二上

二上の陽かげ面ともに、

生しひをしり

繁しみ咲く

馬あ酔し木びの

にほへる子を

我が

捉とり兼ねて、

馬酔木の あしずりしつゝ

吾あはもよしぬ偲あぶ。藤原処女

歌おい了えた姥は、大息をついて、ぐったりした。其から暫らく、山のそよぎ、川瀬の響きばかりが、耳についた。

姥は居すまいを直して、厳かな声こわね音で、誦かたり出した。

とぶとりの 飛鳥の都に、日のみ子様のおそばはべ近く侍る尊いおん方。ささなみの大津の宮に人となり、唐もろこし土の学芸ざえに詣いたり深く、詩からうたも、此国ではじめて作られたは、大友ノ皇子か、其とも此お方か、と申し伝えられる御方。

近江の都は離れ、飛鳥の都の再栄えたその頃、あやまちもあや

まち。日のみ子に弓引くたくみ、恐しや、企てをなされると言
う噂が、立ちました。

たかまのはらひろぬひめのみこと

高天原広野姫尊、おん怒りをお発しになりました、とう
とう池上の堤に引き出して、お討たせになりました。

其お方がお死にの際きわに、深く深く思いこまれた一人のお人がお
ざります。耳面ノ刀自と申す、大織冠たいしよくかんのお娘御でおざり

ます。前から深くお思いになつて居た、と云うでもありません。
唯、此郎いらつめ女も、大津の宮離れの時に、都へ呼び返されて、寂
しい暮しを続けて居られました。等しく大津の宮に愛着をお持
ち遊した右の御方が、愈々いよいよ、磐余いわれの池の草の上で、お命召さ
れると言うことを聞いて、一目見てなごり惜しみがしたくて、

こらえられなくなりました。藤原から池上まで、おひろいでお出でになりました。小高い柴しばの一むらある中から、御様子うかがを窺うて帰ろうとなされました。其時ちらりと、かのお人の、最期に近いお目に止りました。其ひと目が、此世に残る執心となつたのでおざりします。

もゝつたふ 磐余の池に鳴く鴨を 今日のみ見てや、雲隠り
なむ

この思いがけない心残りを、お詠みになつた歌よ、と私ども当た麻ぎまの語部の物語りには、伝えて居ります。

その耳面刀自と申すは、淡海公の妹君、郎女の祖父君南家太おおじ なんけだいじ政大臣ようだいじんには、叔母君にお当りになつてでおざりします。

人間の執心と言うものは、怖いものとはお思いなされぬかえ。其亡き骸は、大和の国を守らせよ、と言う御誂ごじょうで、此山の上、河内から来る当麻路の脇にお埋いけになりました。其が何と、此世の悪心も何もかも、忘れ果てて清すがすが々しい心になりながら、唯そればかりの一念が、残つて居る、と申します。藤原四流の中で、一番美しい郎女が、今におき、耳面刀自と、其幽かくりよ界の目には、見えるらしいのでおざります。女盛りをまだ婿どりなさらぬげの郎女さまが、其力におびかれて、この当麻までお出でになつたのでうて、何でおざりましょう。当麻路に墓を造りましたそのかみ当時、石を搬はこぶ若い衆にのり移つたたま霊が、あの長歌を謳うたうた、と申すのが伝え。

当麻たぎまのかたりのおむな語部ことば媼おむなは、南家の郎女の脅える様を想像しながら、物

語つて居たのかも知れぬ。唯さえ、この深夜、場所も場所である。如何に止めどなくなるのが、「ひとり語り」の癖とは言え、語部の古ふる婆ばばの心は、自身も思わぬ意地くね悪さを蔵しているものである。此が、神さびた職を寂しく守つて居る者の優越感を、充すことにも、なるのであつた。

大貴族の郎女は、人の語を疑うことは教えられて居なかつた。それに、信じなければならぬもの、とせられて居た語部の物語りである。詞の端々ことばまでも、真実を感じて、聴いて居る。

言うとおりに、昔びとの宿執が、こうして自分を導いて来たことは、まことに違いないであろう。其にしても、ついしか見ぬお姿――

尊い御仏と申すような相好が、其お方とは思われぬ。春秋の彼岸
 中日、入り方の光り輝く雲の上に、まざまざと見たお姿。此日本やまと
 の国の人とは思われぬ。だが、自分のまだ知らぬこの国の男子おのこご
 たちには、ああ言う方もあるのか知らぬ。金色の鬢びん、金色の髪かみの
 豊かに垂れかかる片肌は、白々と袒ぬいで美しい肩。ふくよかなお
 顔は、鼻隆たかく、眉秀で夢見るようにまみを伏せて、右手は乳の辺
 に挙げ、脇の下に垂れた左手は、ふくよかな掌を見せて……ああ
 雲の上に朱の唇、匂いやかにほほ笑まれると見た……その倂おもかげ。
 日のみ子さまの御側仕えのお人の中には、あの様な人もおいでに
 なるものだろうか。我が家の父や、兄しやうと人たちも、世間の男たち
 とは、とりわけてお美しい、と女たちは噂するが、其すら似もつ

かぬ……。

尊い女によしよう性は、下賤な人と、口をきかぬのが当時の世おきての掟であ

る。何よりも、其語は、下ぎまには通じぬもの、と考えられていた。それでも、此古物語りをする姥うばには、貴族の語もわかるであろう。郎女は、恥じながら問いかけた。

その人。ものを聞こう。此身の語が、聞きとれたら、答えし
ておくれ。

その飛鳥の宮の日のみ子さまに仕えた、と言うお方は、昔の罪
びとらしいに、其が又何とした訣わけで、姫の前に立ち現れては、
神こつこう々しく見えるであろうぞ。

此だけの語が言い淀みよど、淀みして言われている間に、姥は、郎女

の内に動く心もちの、凡^{およそ}は、氣^けどつたであらう。暗^{あかし}いみ灯の光りの代りに、其頃は、もう東白みの明りが、部屋の内物の形を、臙^{おぼ}ろげに顯^{あらわ}しはじめて居た。

我が説^{ことわけ}明を、お聞きわけられませ。神代の昔びと、天若日子^{あめわかひこ}。天若日子こそは、天^{てん}の神々に弓引いた罪ある神。其すら、其後^ご人の世になつても、氏貴い家々の娘御^{ねや}の閨の戸までも、忍びよると申します。世に言う「天若みこ」と言うのが、其でおざります。

天若みこ。物語りにも、うき世語りにも申します。お聞き及びかえ。

姥は暫らく口を閉じた。そうして言い出した声は、顔にも、年に

も似ず、一段、はなやいで聞えた。

「もゝつたふ」の歌、残された飛鳥の宮の執心びと、世々の藤原の一の媛いちひめに崇たたる天若みこも、顔清く、声心ひ惹く天若みこのやはり、一人でおざりまする。

お心つけられませ。物語りも早、これまで。

其まま石のように、老女はじつとして居る。冷えた夜も、朝影を感じる頃になると、幾らか温みがさして来る。

万法蔵院は、村からは遠く、山によつて立つて居た。暁早い鶏の声も、聞えぬ。もう梢を離れるらしいねぐらどり鳥が、近い端山はやまの木群むらで、羽振はぶきの音を立て初めている。

五

おれは活いきた。

闊くわい空間は、明りのようなものを漂たしていた。併し其は、蒼黒い靄もやの如く、たなびくものであつた。

巖ばかりであつた。壁も、牀とこも、梁はりも、巖であつた。自身のからだすらが、既に、巖になつて居たのだ。

屋根が壁であつた。壁が牀であつた。巖ばかり——。触つても触つても、巖ばかりである。手を伸すと、更に堅い巖が、掌に触れた。脚をひろげると、もつと広い磐ばんじやく石おもとの面が、感じられた。纔わずかにさす薄光りも、黒い巖石が皆吸いとつたように、岩窟いわむろの

中に見えるものはなかった。唯けはい——彼の人の探り歩くらしい空気の微動があつた。

思い出したぞ。おれが誰だつたか、——わか訣つたぞ。

おれだ。此おれだ。大津の宮に仕え、飛鳥の宮に呼び戻されたおれ。滋賀津彦。しがつひこ其が、おれだつたのだ。

歡びの激情を迎えるように、岩窟の中のすべての突角が^{たけ}哮びの反響をあげた。彼の人は、立って居た。一本の木だつた。だが、其姿が見えるほどの、はつきりした光線はなかった。明りに照し出されるほど、纏つた^{まとま}現し^{うつ}身をも、持たぬ彼の人であつた。

唯、岩屋の中に^{しゆくりつ}矗立した、立ち枯れの木に過ぎなかつた。

おれの名は、誰も伝えるものがない。おれすら忘れて居た。長

く久しく、おれ自身にすら忘れられて居たのだ。可愛^{いと}しいおれの名は、そうだ。語り伝える子があつた筈だ。語り伝えさせる筈の語部も、出来て居ただろうに。——なぜか、おれの心は寂しい。空虚な感じが、しくしくと胸を刺すようだ。

——子代^{こしろ}も、名代^{なしろ}もない、おれにせられてしまったのだ。そうだ。其に違いない。この物足らぬ、大きな穴のあいた気持ちには、其で、するのだ。おれは、此世に居なかつたと同前の人間になつて、現^{うつつ}し身^みの人間どもには、忘れ^{おぼ}了^らされて居るのだ。憐^{あは}みのないおつかさま。おまえさまは、おれの妻の、おれに殉^{ともし}死^じにするのを、見殺しになされた。おれの妻の生^あ津^わ子^こは、罪^{つと}びとの子として、何処かへ連れて行かれた。野山のけだものの餌^え

食じきに、くれたのだらう。可愛あはれそうな妻よ。哀あはれなむすこよ。

だが、おれには、そんな事などは、何でも無い。おれの名が伝つたらない。劫ごうしよ初はつから末代まで、此世に出ては消える、天あめの下したの青人草あおひとぐさと一列に、おれは、此世に、影も形も残さない草の葉になるのは、いやだ。どうあつても、不承知だ。

恵みのないおつかさま。お前さまにおすが継りするにも、其おまえさますら、もうおいででない此世かも知れぬ。

くそ——外そとの世界が知りたい。世の中の様子が見たい。

だが、おれの耳は聞える。其なのに、目が見えぬ。この耳すら、世間の語を聞き別けなくなつて居る。闇の中にばかりつぶ瞑つて居たおれの目よ。も一度かつとみひら睜いて、現し世のありのままをう

つしてくれ、……土竜もぐらの目など、おれに貸しおれ。

声は再、寂しずかになつて行つた。独り言する其声は、彼の人の耳にばかり聞えて居るのであろう。丑刻うしに、静謐せいひつの頂上に達した現し世は、其が過ぎると共に、俄にわかに物音が起る。月の、空を行く音すら聞えそうだった四方の山々の上に、まず木の葉が音もなくうごき出した。次いではるかな谿たにのながれの色が、白々と見え出す。更に遠く、大和国くになか中の、何処からか起る一番鶏のつくるとき。

暁が来たのである。里々の男は、今、女の家ねやどの閨戸ねやどから、ひそひそと帰つて行くだろう。月は早く傾いたけれど、光りは深夜の色を保っている。午前二時に朝の来る生活に、村びとも、宮びとも

忙しいとは思わずに、起きあがる。短い暁の目覚めの後、又、物に倚りかかつて、新しい眠りを継ぐのである。

山風は頻りに、吹きおろす。枝・木の葉の相軋めく音が、やむ間なく聞える。だが其も暫らくで、山は元のひっそりとしたけしきに還る。唯、すべてが薄暗く、すべてが隈を持ったように、朧ろになつて来た。

岩窟は、沈々と黝くなつて冷えて行く。

した。した。水は、岩肌を絞つて垂れている。

耳面刀自。おれには、子がない。子がなくなった。おれは、そ

の榮えている世の中には、跡を貽して来なかつた。子を生んでくれ。おれの子を。おれの名を語り伝える子どもを――。

岩^{いわ}牀^{どこ}の上に、再白々と横つて見えるのは、身じろきもせぬからだである。唯その真裸な骨の上に、鋭い感覚ばかりが活^いきているのであつた。

まだ反省のとり戻されぬむくろには、心になるものがあつて、心はなかつた。

耳面刀自の名は、唯の記憶よりも、更に深い印象であつたに違ひはない。自分すら忘れきつた、彼の人の出来あがらぬ心に、骨に沁^しみ、干からびた髓の心までも、唯彫^えりつけられたようになって、残っているのである。

万法蔵院の 晨^{じん} 朝^{ちよう}の鐘だ。夜の曙^{あけいろ}色に、一度騒^{さわ}立^だつた物々の

胸をおちつかせる様に、鳴りわたる鐘の音だ。一ぱし白みかかつて来た東は、更にほの暗い明け昏れの寂けさに返った。

南家の郎女は、一茎の草のそよぎでも聴き取れる 暁 風ぎを、

自身擾すことをすまいと言う風に、見じろきすらもせず居る。

夜の間よりも暗くなった廬の中では、明王像の立ち処さえ見定め

られぬばかりになつて居る。

何処からか吹きこんだ朝山嵐に、御灯が消えたのである。当麻

語部の姥も、薄闇に蹲つて居るのであろう。姫は再、この老女の

事を忘れていた。

ただ一刻ばかり前、這入りの戸を揺つた物音があつた。一度 二

度 三度。更に数度。音は次第に激しくなつて行つた。柩がまる

で、おしちぎられでもするかと思うほど、音に力のこもつて来た時、ちようど、鶏が鳴いた。其きりびつたり、戸にあたる者もなくなつた。

新しい物語が、一切、語部の口にのぼらぬ世が来ていた。けれども、頑かたくなな当麻氏の語部の古姥の為に、我々は今一度、去年以来の物語りをしていても、よいであろう。まことに其は、昨きのこの日からはじまるのである。

六

門をはいると、俄かに松風が、吹きあてるように響いた。

一町も先に、固まつて見える堂伽藍——そこまでずっと、砂地である。

白い地面に、広い葉の青いままであらばつて居るのは、朴ほおの木だ。まともに、寺を圧してつき立っているのは、二上山である。其真下に涅槃ねはんぶつ仏のような姿に横つているのが麻呂子山だ。其頂がやつと、講堂の屋の棟に、乗りかかっているようにしか見えない。

こんな事を、女にょにん人の身で知つて居る訣わけはなかつた。だが、俊敏な此旅びとの胸に、其に似たほのかな綜そうごう合の、出来あがつて居たのは疑われぬ。暫らくの間、その薄緑の山色を仰いで居た。其から、朱塗りの、激しく光る建て物へ、目を移して行つた。

此寺の落慶供養のあつたのは、つい四五日前であつた。まだあの日の喜ばしい騒ぎの響みが、どこかにする様に、麓の村びと等には、感じられて居る程である。

山嵐に吹き暴されて、荒草深い山裾の斜面に、万法蔵院の細々とした御灯の、煽られて居たのに目馴れた人たちは、この幸福な転変に、目を睜つて居るだろう。此郷に田莊を残して、奈良に

数代住みついた豪族の主人も、その日は、帰つて来て居たつけ。

此は、天竺の狐の為わざではないか、其とも、この葛城郡に、昔から残っている幻術師のする迷わしではないか。あまり莊

巖を極めた建て物に、故知らぬ反感まで唆られて、廊を踏み鳴

し、柱を叩いて見たりしたのも、その供人のうちにはあつた。

数年前の春の初め、野焼きの火が燃えのぼって来て、唯一宇あつた萱堂かやどうが、忽痕たちまあともなくなつた。そんな小さな事件が起つて、注意を促してすら、そこに、曾かつうるわて美しい福田と、寺の創はじめられた代よを、思い出す者もなかつた程、それはそれは、微かな遠い昔であつた。以前、疑いを持ち初める里の子どもが、其堂の名に、不審を起した。当麻の村にありながら、山田寺やまだでらと言つたからである。山の背うしろの河内の国安宿部郡あすかべごおりの山田谷から移つて二百年、寂しい道場に過ぎなかつた。其でも一時は、俱舎くしゃの寺として、栄えたこともあつたのだつた。

飛鳥の御世の、貴い御方が、此寺の本尊を、お夢に見られて、おん子を遣され、堂舎をひろげ、住じゅうりよ侶の数をお殖しになつた。

おいおい境内になる土地の地形しぎようの進んでいる最中、その若い貴人が、急に亡くなられた。そうなる筈の、風水の相が、「まろこ」の身を招き寄せたのだらう。よしよし墓はそのまま、其村に築くがよい、との仰せがあつた。其み墓のあるのが、あの麻呂子山だと言う。まろ子というのは、尊い御一族だけに用いられる語で、おれの子というほどの、意味であつた。ところが、其おことばが縁を引いて、此郷の山には、其後亦、貴人をお埋め申すような事が、起つたのである。

だが、そう言う物語りはあつても、それは唯、此里の語部の姥うばの口くちに、そう伝えられている、と言うに過ぎぬ古物語りであつた。纒わすかに百年、其短いと言える時間も、文字に縁遠い生活には、さ

ながら太古を考えると、同じ昔となつてしまつた。

旅の若い女によしやう性は、型かたず摺りの大様な美しい模様をおいた著きる物を襲うて居る。笠は、浅い縁へりに、深い縹はなだいろ色の布が、うなじを隠すほどに、さがつていた。

日は仲春、空は雨あがりの、爽さわやかな朝である。高原の寺は、人の住む所から、自おのずから遠く建つて居た。唯凡およそ、百人の僧俗が、寺中じちゆうに起き伏して居る。其すら、引き続き供養饗きやうえん宴の疲れで、今日はまだ、遅い朝を、姿すら見せずにいる。

その女人は、日に向つてひたすら輝く伽藍がらんの廻りを、残りなく歩いた。寺の南境ざかいは、み墓山の裾から、東へ出ている長い崎の尽きた所に、大門はあつた。其中腹と、東の鼻とに、西塔・東塔が立

って居る。丘陵の道をうねりながら登った旅びとは、東の塔の下
 に出た。雨の後の水気の、立つて居る大和の野は、すっかり澄み
 きつて、若^{わかひる}昼のきらきらしい景色になつて居る。右手の目の下
 に、集中して見える丘陵は傍^{かたおか}岡で、ほのぼのと北へ流れて行く
 のが、葛城川だ。平原の真中に、旅笠を伏せたように見える遠い
 小山は、耳^{みみなし}無の山^{やま}であつた。其右に高くつつ立つている深緑は、
 畝^{うねびやま}傍山。更に遠く日を受けてきらつく水面は、埴^{はにやす}安の池^{いけ}では
 なかろうか。其東に平たくて低い背を見せるのは、聞えた香具山
 なのだろう。旅^{おみなご}の女子の目は、山々の姿を、一つ一つに辿^{たど}つて
 いる。天香^{あめのかぐやま}具山をあれだと考えた時、あの下が、若い父^{ちちはは}母の
 育つた、其から、叔父叔母、又一族の人々の、行き来した、藤原

の里なのだ。

もう此上は見えぬ、と知れて居ても、ひとりで、爪先立てて伸び上る気持ちになつて来るのが抑えきれなかつた。

香具山の南の裾に輝く瓦舎かわらやは、大官大寺だいかんだいじに違いない。其から

更に真南の、山と山との間に、薄く霞んでいるのが、飛鳥の村なのであろう。父の父も、母の母も、其又父母も、皆あのあたりで生い立たれたのであろう。この国の女子に生れて、一足も女部屋を出ぬのを、美德とする時代に居る身は、親の里も、祖先の土も、まだ踏みも知らぬ。あの陽炎かげろうの立っている平原を、此足で、隅から隅まで歩いて見たい。

こう、その女によしやう性は思っている。だが、何よりも大事なことは、

此郎いらつめ女——貴女は、昨日の暮れ方、奈良の家を出て、ここまで歩いて来ているのである。其も、唯のひとりであつた。

家を出る時、ほんの暫し、心を掠かすめた——父君がお聞きになつたら、と言う考えも、もう気にはかからなくなつて居る。乳母があわてて探すだろう、と言う心が起つて来ても、却かえつてほのかな、こみあげ笑いを誘う位の事になつている。

山はずっしりとおちつき、野はおだやかに畝うねつて居る。こうして居て、何の物思いがあるう。この貴あてな娘御は、やがて後をふり向いて、山のなぞえについて、次第に首をあげて行つた。

二上山。ああこの山を仰ぐ、言い知らぬ胸騒ぎ。——藤原・飛鳥の里々山々を眺めて覺えた、今の先の心とは、すっかり違つた胸

の悸ときめき。旅の郎女は、脇目も触らず、山に見入っている。そうして、静かな思いの充ちて来る満悦を、深く覚えた。昔びとは、確實な表現を知らぬ。だが謂いわば、——平野の里に感じた喜びは、かこしよう過去生に向けてのものであり、今此山を仰ぎ見ての驚きは、らいせ来世を思う心躍りだ、とも謂えよう。

塔はまだ、嚴重にやらいを組んだまま、人の立ち入りを禁いましめてあった。でも、ものに拘泥することを教えられて居ぬ姫は、何時の間にか、塔の初しよじゆう重の欄干に、自分のよりかかって居るのに気がついた。そうして、しみじみと山に見入って居る。まるで瞳が、吸いこまれるように。山と自分とに繋つながる深い交渉を、又くり返し思い初めていた。

郎女の家は、奈良東城、右京三条第七坊にある。祖父武智麻呂の
ここで亡くなつて後、父が移り住んでからも、大分の年月になる。
父は男おとこざかり 壮には、横佩よこはきの大将だいしようと謂われる程、一ふりの大
刀のさげ方にも、工夫を凝らさずには居られぬだて者ものであつた。
なみの人の豎たてにさげて佩く大刀を、横えて吊る佩き方を案出した
人である。新しい奈良の都の住人は、まだそうした官吏としての、
華奢きやしやな服装を趣向このむまでに到つて居なかつた頃、姫の若い父は、
近代の時世装いまきに思いを凝して居た。その家に覲たずねて来る古い留学
生や、新来いまきの帰化僧などに尋ねることも、張文成などの新作の物
語りの類を、問題にするようなのとも、亦違ちがうていた。
そうした闊達かつたつな、やまとごころの、赴くままにふるもうて居る

間に、才ざい優れた族うからびと人が、彼を乗り越して行くのに気がつか
なかつた。姫には叔父、彼——豊成には、さしつぎの弟、仲麻呂で
ある。その父君も、今は筑紫に居る。すくな少くとも、姫などはそう信
じて居た。家族の半以上は、太宰帥だざいのそつのはなばなしい生活の装
いとして、連れられて行つていた。宮廷から賜る資人とねり・僉仗たちも、大
貴族の家の門地の高さを示すものとして、美々しく著飾らされて、
皆任地へついで行つた。そうして、奈良の家には、その年は亦と
りわけ、寂しい若葉の夏が来た。
しず寂かな屋敷には、響く物音もない時が、多かつた。この家も世間
どおりに、女部屋は、日あたりに疎い北の屋にあつた。その西側
に、小な薮しとみど戸があつて、其をつきあげると、方三尺位な牕まどにな

るように出て来ている。そうして、其内側には、夏冬なしに簾すだれが垂れてあつて、戸のあげてある時は、外からの隙見ふせを禦おいだ。

それから外廻りは、家の広い外郭になつて居て、大炊屋おおいやもあれば、湯殿ひた火焼やき屋なども、下人の住いに近く、立つている。苑そのと言われる菜畠や、ちよつとした果樹園らしいものが、女部屋の窓から見える、唯一の景色であつた。

武智麻呂ぞんしょう存ぞんしょう生の頃から、此屋敷のことを、世間では、南家なんけと呼び慣わして来ている。此頃になつて、仲麻呂の威勢が高まつて来たので、何となく其古い通称は、人の口から薄れて、其に替るとな称となえが、行われ出した様だつた。三条七坊をすっかり占めた大屋敷を、一垣内ひとかきつ——一ひとあざな字みなと見倣して、横よこはき佩かきつ牆内かきつと言う者が、

著しく殖えて来たのである。

その太宰府からの音ずれが、久しく絶えたと思つていたら、都とは目と鼻の難波に、いつか還り住んで、遥かに筑紫の政を聴いていた帥の殿であつた。其父君から遣された家の子が、一ひとくるま車に積み余るほどの家づとを、家に残つた家族たち殊に、姫君にとつてはこんで来た。

山国の狭い平野に、一代一代都みやこうつ遷しのあつた長い歴史の後、ここ五十年、やつと一つ処に落ちついた奈良の都は、其でもまだ、なかなか整うまでには、行つて居なかつた。

官庁や、大寺が、によつきりによつきり、立っている外は、貴族の屋敷が、処々むやみに場をとつて、その相間相間に、板屋や瓦か

屋わらやが、交りまじりに続いている。其外は、広い水田と、畠と、
 存外多い荒蕪地こうぶちの間に、人の寄りつかぬ塚や岩群いわむらが、ちらばつ
 て見えるだけであつた。兎や、狐が、大路小路を駆け廻る様な
 も、毎日のこと。つい此頃も、朱雀しゅじやく大路くおおじの植え木の梢を、夜
 になると、鼯鼠むささびが飛び歩くと言うので、一騒ぎした位である。
 横佩家の郎女が、称讚しょうさん浄土じょうど仏ぶつ撰しよ受じゆ経ぎを写しはじめたの
 も、其頃からであつた。父の心づくしの贈り物の中で、一番、姫
 君の心を饒にぎやかにしたのは、此新訳の阿弥陀経あみだきやういちかん一巻であつた。
 国の版図の上では、東に偏り過ぎた山国の首都よりも、太宰府は、
 遥かに開けていた。大陸から渡る新しい文物は、皆一度は、この
 遠とおの宮廷みやかど領を通過するのであつた。唐から渡つた書物などで、太

宰府ぎりに、都まで出て来ないものが、なかなか多かつた。

学問や、芸術の味を知り初めた志の深い人たちは、だから、大唐までは望まれぬこと、せめて太宰府へだけはと、筑紫下りを念願するほどであつた。

南家の郎いらつめ女の手に入つた称讚浄土経も、大和一国の大おおてら寺と言いう大寺に、まだ一部も蔵せられて居ぬものであつた。

姫は、薮しとみど戸近くに、時としては机を立てて、写経をしていることもあつた。夜も、侍女たちを寝静まらしてから、油あぶらび火の下で、一心不乱に書き写して居た。

百部は、夙はやくに写し果した。その後は、千部手写の発願をした。

冬は春になり、夏山と繁つた春日山も、既に黄葉もみじして、其がもう

散りはじめた。蟋蟀こおろぎは、昼も苑その一面に鳴くようになった。佐保川の水を堰せき入れた庭の池には、遣り水伝いに、川千鳥の啼なく日すら、続くようになった。

今朝も、深い霜朝を、何処からか、鴛鴦おしどりの夫婦鳥つまどりが来て浮んで居ります、と童女わらわめが告げた。

五百部を越えた頃から、姫の身は、目立ってやつれて来た。ほんの纒わずかの眠りをとる間も、ものに驚いて覚めるようになった。其でも、八百部の声を聞く時分になると、衰えたなりに、健康は定まって来たように見えた。やや蒼みを帯びた皮膚に、心もち細つて見える髪が、愈々いよいよ黒く映え出した。

八百八十部、九百部。郎女は侍女にすら、ものを言うことを厭いとう

ようになった。そうして、昼すら何か夢見るような目つきして、うつとり葎戸ごしに、西の空を見入つて居るのが、皆の注意をひくほどであつた。

實際、九百部を過ぎてからは筆も一向、はかどらなくなつた。二十部・三十部・五十部。心ある女たちは、文字の見えない自身たちのふがいなさを悲しんだ。郎女の苦しみを、幾分でも分けることが出来ように、と思うからである。

南家の郎女が、宮から召されることになるだろうと言う噂が、京らくがい・洛外らくがいに広がつたのも、其頃である。屋敷中の人々は、上近くつか事える人たちから、垣内かきつの隅に住む奴隸やつこ・婢めやつこ・奴の末にまで、顔を輝かして、此とり沙汰を迎えた。でも姫には、誰一人其を聞か

せる者がなかつた。其ほど、此頃の郎女は氣むつかしく、外目よそめに見えていたのである。

千部手写の望みは、そうした大願から立てられたものだろう、と言ふ者すらあつた。そして誰ひとり、其を否む者はなかつた。

南家の姫の美しい膚はだは、益々透きとおり、潤んだ目は、愈々大きく黒々と見えた。そうして、時々声に出して誦じゆする経の文もんが、物の音ねに響たえようもなく、さやかに人の耳に響く。聞く人は皆、自身みの耳を疑うた。

去年の春分の日の事であつた。入り日の光りをまともに受けて、姫は正座して、西に向つて居た。日は、此屋敷からは、稍ちや坤じさるによつた遠い山の端に沈むのである。西空の棚雲の紫に輝く上で、落

日は俄にわかに転くるぎ出した。その速さ。雲は炎になつた。日は黄金おうごんの丸まるになつて、その音も聞えるか、と思ふほど鋭く廻つた。雲の底から立ち昇る青い光りの風——、姫は、じつと見つめて居た。やがて、あらゆる光りは薄れて、雲は霽はれた。夕闇の上に、目を疑うほど、鮮やかに見えた山の姿。二上山である。その二つの峰の間に、ありありと莊しょうごん嚴おもかげな人の倂あらわが、瞬間あと顕れて消えた。後は、真暗な闇の空である。山の端も、雲も何もない方に、目を凝して、何時までも端坐して居た。郎女の心は、其時から愈々澄んだ。併し、極めて寂しくなり勝まさつて行くばかりである。ゆくりない日が、半年の後に再来て、姫の心を無むし上の歡喜に引き立てた。其は、同じ年の秋、彼岸中日の夕方であつた。姫は、

いつかの春の日のように、坐していた。朝から、姫の白い額の、故もなくひよめいた長い日の、後のちである。二上山の峰を包む雲の上に、中秋の日の爛らんじゆく熟した光りが、くるめき出したのである。雲は火となり、日は八尺の鏡と燃え、青い響きの吹雪を、吹き捲まく嵐——。

雲がきれ、光りのしずまった山の端は細く金の外輪を靡なびかして居た。其時、男岳・女岳の峰の間に、ありありと浮き出た 髪 頭 肩 胸——。

姫は又、あの梯を見ることが、出来たのである。

南家の郎女の幸福な噂が、春風に乗って来たのは、次の春である。姫は別様の心躍りを、一月も前から感じて居た。そうして、日を

と数り初めて、ちようど、今日と言う日。彼岸中日、春分の空が、朝から晴れて、雲雀は天に翔り過ぎて、帰ることの出来ぬほど、青雲が深々とたなびいて居た。郎女は、九百九十九部を写し終えて、千部目にとりついて居た。日一日、のどかな温い春であつた。経巻の最後の行、最後の字を書きあげて、ほつと息をついた。あたりは俄かに、薄暗くなつて居る。目をあげて見る薜窓の外には、しとしとと——音がしたたつて居るではないか。姫は立つて、手ずから簾をあげて見た。雨。苑の青菜が濡れ、土が黒ずみ、やがては瓦屋にも、音が立つて来た。

姫は、立つても坐ても居られぬ、焦躁に悶えた。併し日は、

益々暗くなり、夕暮れに次いで、夜が来た。

茫然ぼうぜんとして、姫はすわつて居る。人声も、雨音も、荒れ模様に加つて来た風の響きも、もう、姫は聞かなかつた。

七

南家の郎女の神隠しに遭つたのは、其夜であつた。家人は、翌朝空が霽れ、山々がなごりなく見えわたる時まで、気がつかずに居た。横佩よこはき牆内かきつに住む限りの者は、男も、女も、上の空になつて、洛中らくちゆう洛外らくがいを馳はせ求めた。そうした奔り人はしびとの多く見出される

場処と言う場処は、残りなく捜された。春日山の奥へ入つたもの

は、伊賀境までも踏み込んだ。高円山たかまどやまの墓原も、佐紀の沼地・

雑木原も、又は、南は山村やまむら、北は奈良山、泉川の見える処まで

馳せ廻つて、戻る者も戻る者も、皆空足からあしを踏んで来た。

姫は、何処をどう歩いたか、覚えがない。唯家を出て、西へ西へと辿たどつて来た。降り募るあらしが、姫の衣を濡した。姫は、誰にも教わらないで、裾はぎを脛まであげた。風は、姫の髪を吹き乱した。姫は、いつとなく、髻もとどりをとり束ねて、襟から着物の中に、含くくみ入れた。夜中になつて、風雨が止み、星空が出た。

姫の行くてには常に、二つの峰の並んだ山の立ち姿がはつきりと聳そびえて居た。毛孔けあなの豎たつような畏おそろしい声を、度々聞いた。ある時は、鳥の音であつた。其後、頻しきりなく断続したのは、山の獣の叫

び声であつた。大和の内も、都に遠い広瀬・葛城あたりには、人居などは、ほんの忘れ残りのように、山陰などにあるだけで、あとは曠野あらの。それに——本村ほんむらを遠く離れた、時はずれの、人棲すまぬ田居たいいばかりである。

片破れ月が、上あがつて来た。其が却かえつて、あるいている道の辺ほとりの凄すごさを照し出した。其でも、星明りで辿つて居るよりは、よるべを覚えて、足が先へ先へと出た。月が中天へ来ぬ前に、もう東の空が、ひいわり白んで来た。

夜のほのぼの明けに、姫は、目を疑うばかりの現実に行きあつた。——横佩家の侍女たちは何時も、夜の起きぬけに、一番最初に目撃した物事で、日のよしあしを、占つて居るようだった。そう言

う女どものふるまいに、特別に気は牽ひかれなかつた郎女だけれど、よく其人々が、「今朝の朝目がよかつたから」「何と言う情ない朝目でしよう」などと、そわそわと興奮したり、むやみに塞ふさぎこんだりして居るのを、見聞きしていた。

郎いらつめ女は、生れてはじめて、「朝目よく」と謂いつた語を、内容深く感じたのである。目の前に赤々と、丹塗にぬりに照り輝いて、朝日を反射して居るのは、寺の大門ではないか。そうして、門から、更に中門が見とおされて、此もおなじ丹塗りに、きらめいて居る。山裾こつぱいの勾配こうばいに建てられた堂・塔・伽藍がらんは、更に奥深く、朱あけに、青に、金色に、光りの棚雲を、幾重にもつみ重ねて見えた。朝目のすがしきは、其ばかりではなかつた。其寂せき寞ぼくたる光りの海か

ら、高く抽ぬきでて見える二上の山。淡海公の孫、大織冠たいしよくかんには曾孫。藤氏族長太宰帥、南家なんけの豊成、其第一だいいち嬢子じょうしなる姫である。屋敷から、一步はおろか、女部屋を膝いざ行り出ることすら、たまさかにもせぬ、郎女のことである。順じゆんとう道みちならば、今頃は既に、藤原の氏神河内の枚岡ひらおかの御神か、春日の御社みやしろに、巫女みこの君として仕えているはずである。家に居ては、男を寄せず、耳に男の声も聞かず、男の目を避けて、仄ほのぐら暗い女部屋に起き臥ふししている人である。世間の事は、何一つ聞き知りも、見知りもせぬように、おうしたてられて来た。

寺の浄域が、奈良の内外うちとにも、幾つとあつて、横佩牆内よこはきかきつと讃えられてゐる屋敷よりも、もつと広大なものだ、と聞いて居た。そ

うでなくても、経文の上に伝えた浄土のしやうごん莊嚴をうつすその建
 て物の様は想像せぬではなかつた。だが目のあたり見る尊さは唯
 息を呑むばかりであつた。之に似た驚きの経験は曾て一度したこ
 とがあつた。姫は今其を思い起して居る。簡素と豪奢との違い
 こそあれ、驚きの歓喜は、印象深く残っている。

今の太上天皇様が、まだ宮廷の御あるじで居させられた頃、八歳
 の南家の郎女は、童女として、初のてんじやう殿上をした。穆々た
 る宮の内の明りは、ほのかな香気を含んで、流れて居た。昼すら
まよ真夜に等しい、御帳台のあたりにも、尊いみ声は、しやうしやう昭々と
たま珠を揺る如く響いた。物わきまもない筈の、八歳の童女が感泣
 した。

「南家には、惜しい子が、女になって生れたことよ」と仰せられた、と言う畏れ多い風聞が、暫らく貴族たちの間に、くり返された。其後十二年、南家の娘は、二十はたちになっていた。幼いからの聡さとさにかわりはなくて、玉・水すいしやう精の美しさが益々加つて来たとの噂が、年一年と高まつて来る。

姫は、大門の鬨しきみを越えながら、童女殿上の昔の畏かしこさを、追想して居たのである。長いいしきみち磴道いしきみちを踏んで、中門に届く間にも、誰一人出あう者がなかつた。恐れを知らず育てられた大貴族の郎女は、度つつましく併しのどかに、御堂御堂を拝んで、岡の東塔に来たのである。

ここからは、北大和の平野は見えぬ。見えたところで、郎女は、

奈良の家を考え浮べることも、しなかつたであろう。まして、家人たちが、神隠しに遭^おうた姫を、探しあぐんで居ようなどとは、思いもよらなかつたのである。唯うつとりと、塔の下^{もと}から近々と仰ぐ、二上山の山肌に、現^うし世^よの目からは見えぬ姿を惟^{おも}い観^みようとして居るのであろう。

此時分になつて、寺では、人の動きが繁くなり出した。晨^{じんちよう}朝^{ちよう}の勤めの間も、うとうとして居た僧たちは、爽^{さわ}やかな朝の眼^みを睜^{みひら}いて、食^{じきどう}堂^{どう}へ降りて行つた。奴婢^{ぬひ}は、其々もち場持ち場の掃除を励む為に、ようべの雨に洗つたようになった、境内^{すなじ}の沙地^じに出て来た。

そこにござるのは、どなたぞな。

岡の陰から、恐る恐る頭をさし出して問うた一人の寺奴やっこは、あるべからざる事を見た様に、自分自身を咎とがめるような声をかけた。

女人の身として、這はい入ることの出来ぬ結界を犯していたのだった。姫は答えよう、とはせなかつた。又答えようとしても、こう言う時に使う語には、馴れて居ぬ人であつた。

若もし又、適当な語を知つて居たにしたところで、今はそんな事に、考えを紊みだされては、ならぬ時だったのである。

姫は唯、山を見ていた。依然として山の底に、ある倂おもかげを觀じ入つてゐるのである。寺奴は、二言とは問いかけなかつた。一晚のさすらいでやつては居ても、服装から見てすぐ、どうした身分の人か位の判断は、つかぬ筈はなかつた。又暫らくして、四五人の

登あしおと音が、びたびたと岡へ上つて来た。年のいったのや、若い僧たちが、ばらばらと走つて、塔のやらいの外まで来た。

ここまで出て御座れ。そこは、男でも這入るところではない。

女によにん人は、とつとと出てお行きなされ。

姫は、やっと気がついた。そうして、人とあらそわぬ癖をつけられた貴族の家の子は、重い足を引きながら、竹垣の傍まで来た。

見れば、奈良のお方そうなが、どうして、そんな処にいらつしやる。

それに又、どうして、ここまでお出でだった。伴ともの人も連れず
に――。

口々に問うた。男たちは、咎める口とは別に、心はめいめい、貴

い女性をいたわる気持ちになつて居た。

山をおがみに……。

まことに唯一ひとこと詞。当の姫すら思い設けなんだ詞ことばが、匂うが如く出た。貴族の家庭の語と、凡下ほんげの家々の語とは、すっかり變つて居た。だから言い方も、感じ方も、其うえ、語其ものさえ、郎女の語が、そつくり寺の所化輩しよけはいには、通じよう筈がなかつた。

でも其でよかつたのである。其でなくて、語の内容が、其まま受けとられようものなら、南家の姫は、即座に氣のふれた女、と思われてしまつたであらう。

それで、御館みたちはどこぞな。

みたち……。

おうちは……。

おうち……。

おやかたは、と問うのだよ——。

おお。家はとや。右京藤原南家……。

俄然^{がぜん}として、群集の上にざわめきが起つた。四五人だつたのが、あとから後から登つて来た僧たちも加つて、二十人以上にもなつて居た。其が、口々に喋^{しゃべ}り出したものである。

ようべの嵐に、まだ残りがあつたと見えて、日の明るく照つて居る此小昼^{こひる}に、又風が、ざわつき出した。この岡の崎にも、見おろす谷にも、其から二上山へかけての尾根尾根にも、ちらほら白く見えて、花の木がゆすれて居る。山の此方^{こなた}にも小桜の花が、咲き

出したのである。

此時分になつて、奈良の家では、誰となく、こんな事を考えはじめていた。此はきつと、里方の女たちのよくする、春の野遊びに出られたのだ。——何時からとも知らぬ、習しである。春秋の、日と夜と平分する其頂上に当る日は、一日、日の影を逐おうて歩く風が行われて居た。どこまでもどこまでも、野の果て、山の末、海の渚まで、日を送つて行く女衆が多かつた。そうして、夜に入つてくたくたになつて、家路を戻る。此しきた為来りを何時となく、女たちの咄はなすのを聞いて、姫が、女の行として、この野遊びをする気になられたのだ、と思つたのである。こう言う、考えに落ちつくわかと、ありようもない考えだと訣わかつて居ても、皆の心が一時、ほ

うと軽くなつた。

ところが、其日も昼さがりになり、段々夕光ゆうかげの、催して来る時刻が来た。昨日は、駄目になつた日の入りの景色が、今日は中日にも劣るまいと思われる華やかさで輝いた。横佩家の人々の心は、再重くなつて居た。

八

奈良の都には、まだ時おり、石城しきと謂いわれた石垣を残して居る家の、見かけられた頃である。度々の太政官だいじょうがん符ふで、其を家の周りに造ることが、禁ぜられて来た。今では、宮廷より外には、石

城を完全にとり廻した豪族の家などは、よくよくの地方でない限りは、見つからなくなつて居る筈なのである。

其の一つは、宮廷の御在所が、御一代御一代に替つて居た千数百年の歴史の後に、飛鳥の都は、宮殿の位置こそ、数町の間をあちこちせられたが、おなじ山河一帯の内にあつた。其で凡^{およそ}都^{みやこう}遷^{うつ}しのなかつた形になつたので、後から後から地割りが出来て、相応な都^{としやう}城の姿は備えて行つた。其数朝の間に、旧族の屋敷は、段々、家構えが整うて来た。

葛城に、元のままの家を持つて居て、都と共に一代ぎりの、屋敷を構えて居た蘇^{そが}我^が臣^{おみ}なども、飛鳥の都では、次第に家作りを拡げて行つて、石城^{しき}なども高く、幾重にもとり廻して、凡永久の館

作りをした。其とおなじ様な気持ちから、どの氏でも、大なり小なり、そうした石城づくりの屋敷を構えるようになって行つた。蘇我臣ひとなが一流れで最栄えた島の大臣家おとどけの亡びた時分から、石城の構えは禁められ出した。

この国のはじまり、天から授けられたと言う、宮廷に伝わる神の御詞みことばに背く者は、今もなかつた。が、書いた物の力は、其が、どのような由緒のあるものでも、其ほどの威力を感じるに到らぬ時代が、まだ続いて居た。

其飛鳥の都も、高たかまの天原はらひろぬひめのみことさま広野おほしめ姫尊おほしめ様の思召おほしめしで、其から一里北の藤井が个原がに遷され、藤原の都と名を替えて、新しい唐もろこ様しやうの端正きんせきらしさを尽した宮殿が、建ち並ぶ様になつた。近い飛

鳥から、新渡来の高麗馬に跨つて、馬上で通う風流士もあるにはあつたが、多くはやはり、鷺栖の阪の北、香具山の麓から西へ、新しく地割りせられた京城の坊々に屋敷を構え、家造りをした。その次の御代になつても、藤原の都は、日に益し、宮殿が建て増されて行つて、ここを永宮と遊ばす思召しが、伺われた。その安堵の心から、家々の外には、石城を廻すものが、又ぼつぼつ出て来た。そうして、そのはやり風俗が、見る見るうちに、また氏々の族長の家囲いを、あらかた石にしてしまった。その頃になつて、天真宗豊祖父尊様がおかくれになり、御母日本根子天津御代豊国成姫の大尊様がお立ち遊ばした。その四年目思いもかけず、奈良の都に宮遷しがあつた。ところがまるで、

追っかけるように、藤原の宮は固もとより、目ぬきの家並みが、不意の出火で、其こそ、あつと言う間に、痕形あとかたもなく、空そらの有ものとなつてしまった。もう此頃になると、太政官符だいじょうがんぷに、更に厳しいことわき添書ことわきがついて出ずとも、氏々の人は皆、目の前のすばやい人事自然の交錯した転変に、目を瞠みはるばかりであつたので、久しい石城の問題も、其で、解決がついて行つた。

古い氏種姓うじすじょうを言い立てて、神代以来の家職の神聖を誇つた者どもは、其家職自身が、新しい藤原奈良の都には、次第に意味を失つて来ている事に、気がついて居なかつた。

最早くそこに心づいた、姫の祖父淡海公などは、古き神秘を誇つて来た家職を、末代まで伝える為に、別に家を立てて中臣の名を

保とうとした。そうして、自分・子供ら・孫たちと言う風に、
 ちはやく、新しい官つかさびと人の生活に入り立って行つた。

ことし、四十を二つ三つ越えたばかりの大おおとも伴家持は、父旅人たびと
 の其年頃よりは、もつと優れた男ぶりであつた。併し、世の中は
 もう、すっかり變つて居た。見るもの障るもの、彼の心を苛いらつか
 せる種にならぬものはなかつた。淡海公の、小百年前に実行して
 居る事に、今はじめて自分の心づいた鈍おそましさが、憤らずに居ら
 れなかつた。そうして、自分とおなじ風の性向の人の成り行きを、
 まざまざ省みて、慄りつぜん然とした。現に、時に誇る藤原びとでも、
 まだ昔風の夢に泥なすんで居た南家の横よこ佩右大臣は、さきおとし、
 太宰員外帥だざいのいんがいのそつに貶おとされて、都を離れた。そうして今は、難波

で謹慎しているではないか。自分の親旅人も、三十年前に踏んだ道である。

世間の氏うじのかみけ上家の主人は、大方もう、石城など築き廻まわして、大門小門を繋つなぐと謂いつた要害と、裝飾とに、興味を失いかけて居るのに、何とした自分だ。おれはまだ現に、出来るなら、宮廷のお目こぼしを頂いて、石に囲われた家の中で、家の子どもを集め、氏人たちを召よびつどえて、弓場ゆばに精励させ、棒術ほこゆけ・大刀かきに出精させよう、と謂つたことを空想して居る。そうして年々としどし頻繁に、氏神其外の神々を祭っている。其度毎に、家の語部おおとものか大伴おほともの語造たりのみやつこのおむな姫たちを呼んで、之つかまに捉え処もない昔代むかしよの物語りをさせて、氏人に傾聴を強いて居る。何だか、空くうな事に力を入れ

て居たように思えてならぬ寂しさだ。

だが、其氏神祭りや、祭りの後宴ごえんに、大勢の氏人の集ることは、とりわけやかましく言われて来た、三四年以来の法度はつとである。こんな溜め息たいききを洩もらしながら、大伴氏の旧ふるい習しを守つて、どこまでも、宮廷守護の為の武道の伝襲に、努める外はない家持だったのである。

越中守として踏み歩いた越路の泥のかたが、まだ行むか膝かから落ちきらぬ内に、もう復また、都を離れなければならぬ時の、迫つて居るような気がして居た。其中、此針むしろの筵むしろの上で、兵部少輔ひょうぶしょうぶから、大輔たいふに昇進した。そのことすら、益々脅迫感を強める方にばかりはたらいた。今年五月にもなれば、東大寺の四天王像の開眼が行

われる筈で、奈良の都の貴族たちには、すでに寺から内見を願つて来て居た。そうして、忙しい世の中にも、暫らくはその評判が、すべてのいざこざをおし鎮める程に、人の心を浮き立たした。本朝出来の像としてはまず、此程物凄^{てんぶ}い天部の姿を拝んだことは、はじめでだ、と言うものもあつた。神代の荒^{あらがみ}神たちも、こんな形相でおありだつたらう、と言う噂も聞かれた。

まだ公^{おおやけ}の供養もすまぬのに、人の口はうるさいほど、頻繁に流説をふり撒^まいていた。あの多聞天と、広目天との顔つきに、思い当るものがないか、と言うのであつた。此はここだけの咄^{はなし}だよ、と言つて話したのが、次第に広まって、家持の耳までも聞えて来た。なるほど、憤怒の相もすさまじいにはすさまじいが、あれがどう

も、当今大倭やまと一だと言われる男たちの顔、そのままだと言うのである。貴人は言わぬ、こう言う種類の噂は、えて供をして見て来た道々の博士たちと謂った、心蔑さましいものの、言いそうな事である。

多聞天は、大師藤原恵美中ちゆうけい卿だ。あの柔和な、五十を越してもまだ、三十代の美しさを失わぬあの方が、近頃おこりつぽくなつて、よく下官や、仕え人を叱るようになった。あの円満うまし人びとが、どうしてこんな顔つきになるだろう、と思われる表情をすることがある。其面おももちそつくりだ、と尤もつともらしい言い分なのである。そう言えば、あの方が壮盛わかざかりに、棒術ここのを嗜んで、今にも事あれかしと謂った顔で、立派よろいな甲をつけて、のっしのっしと長い物を

杖つゑいて歩かれたお姿が、あれを見ていて、ちらつくようだなどと相あいづち槌づちをうつ者も出て来た。

其では、広目天の方はと言うと、

さあ、其そのがの——。

と誰に言わせても、ちよつと言ひ洩るはるらるるように、困った顔をして見せる。

実は、ほんの人の噂だの。噂だから、保証は出来ぬの。義淵僧正の弟子の道鏡法師に、似てるぞなというがや。……けど、他人ひとに言いわせると、——あれはもう、二十幾年にもなるかいや

——筑紫で伐うたれなされた前ぜん太だ宰ざい少の弐しょううに——藤原広嗣の殿にに
生しょううつつ 写うつつ しじや、とも言うがいよ。

わしには、どちらとも言えんがの。どうでも、見たことのあるお人に似て居さつしやるには、似ていさつしやるげなが……。

何しろ、此二つの天部が、互に敵視するような目つきで、睨みあつて居る。噂を気にした住じゅうりよ侶たちが、色々に置き替えて見たが、どの隅からでも、互に相手の姿を、眦まなじりを裂いて見つめて居る。とうとうあきらめて、自然にとり沙汰の消えるのを待つより為方しかたがない、と思うようになったと言う。

若しもや、天下に大乱でも起らなければええが——。

こんな呶さわきは、何時までも続きそうに、時と共に倦うまずに語られた。

前少貳殿でなくて、弓削新発意ゆげしんぼちの方であつてくれれば、いつそ

安心だがなあ。あれなら、事を起しそうな房主でもなし。起し
たくても、起せる身分でもないじやまで——。

言いたい傍ほうだい題だいな事を言つて居る人々も、たつた此一つの話題を
持ちあぐね初めた頃、噂の中の大師えみのあそん恵美朝臣の姪の横佩よこはきけ家の郎い
女らつめが、神隠しに遭おうたと言う、人の口の端に、旋風つじかぜを起すよ
うな事件が、湧き上つたのである。

九

兵部大輔ひょうぶたいふ大伴家持は、偶然この噂を、極めて早く耳にした。ち
ようど、春分から二日目の朝、朱雀大路を南へ、馬をやって居た。

二人ばかりの資人とねりが徒歩で、驚くほどに足早について行く。此は、晋唐の新しい文学の影響を、受け過ぎるほど享うけ入れた文人かたぎの彼には、数年来珍しくもなくなった癖である。こうして、何処まで行くのだろう。唯、朱雀の並み木の柳の花がほほけて、霞のように飛んで居る。向うには、低い山と、細長い野が、のどかに陽炎かげろうばかりである。資人の一人が、とつと追いついて来たとすると、主人の鞍くらに顔をおしつける様にして、新しい耳を聞かした。今行きすぎうた知り人の口から、聞いたばかりの噂である。それで、何か――。娘御の行くえは知れた、と言うのか。はい……。いいえ。何分、その男がとり急いで居りまして。この間抜け。話をもっと上手に聴くものだ。

柔らかく叱つた。そこへ今一人の伴が、追いついて来た。息をき
らしている。

ふん。汝は聞き出したね。南家の嬢子は、どうなった——。

出端に油かけられた資人は、表情に隠さず心の中を表した此頃の
人の、自由な咄し方で、まともに鼻を蠢して語つた。

当麻の邑まで、おととい夜の中に行つて居たこと、寺からは、昨
日午後横佩牆内へ知らせが届いたこと其外には、何も聞きこむ間
のなかつたことまで。家持の聯想は、環のように繋つて、暫ら
くは馬の上から見る、街路も、人通りも、唯、物として通り過ぎ
るだけであつた。

南家で持つて居た藤原の氏上職が、兄の家から、弟仲麻呂—

押勝一の方へ移ろうとしている。来年か、再来年さらいなんの枚岡祭りに、参向する氏人の長者は、自然かの大師のほか、人がなくなつて居る。恵美家からは、嫡子久須麻呂の為、自分の家の第一だいいちじょうし嬢子じょうしをくれとせがまれて居る。先日も、久須麻呂の名の歌が届き、自分の方でも、娘に代つて返し歌を作つて遣した。今朝も今朝、又折り返して、男からの懸想文けそうぶみが、来ていた。

その壻候むこがね補の父なる人は、五十になつても、若かつた頃の容色に頼む心が失せずについて、兄の家娘にも執心は持つて居るが、如何に何でも、あの郎女だけには、とり次げないで居る。此は、横佩家へも出入りし、大伴家へも初中しようちゆう終来ふるとしる古刀自ふるとしの、人のわるい内証話であつた。其を聞いて後、家持自身も、何だか好奇心に似

たものが、どうかすると頭を擡もたげて来て困った。仲麻呂は今年、五十を出ている。其から見れば、ひとまわりも若いおれなどは、思い出にもう一度、此句やかな貌かお花はなを、垣内かきつの坪苑つぼに移せぬ限りはない。こんな当時の男が、皆持った心おどりに、はなやいだ、明るい気がした。

だが併し、あの郎女は、藤原四家の系統すじで一番、神かんさびたたちを持つて生れた、と謂いわれる娘御である。今、枚岡の御神に仕えて居る齋いっ姫ひめの罷やめる時が来ると、あの嬢子おとめが替つて立つ筈だ。其で、貴い所からのお召しにも応じかねて居るのだ。……結局、誰も彼も、あきらめねばならぬ時が来るのだ。神の物は、神の物――。横佩家の娘御は、神の手に落ちつくのだろう。

ほのかな感傷が、家持の心を浄めて過ぎた。おれは、どうもあきらめが、よ過ぎる。十を出たばかりの幼さで、母は死に、父は疾んで居る太宰府へ降つて、夙くから、海の彼方の作り物語りや、

唐詩もろこしうたのおかしさを知り初めたのが、病みつきになったのだ。

死んだ父も、そうした物は、或は、おれよりも嗜きだったかも知れぬほどだが、もつと物に執著しゅうじやくが深かった。現に、大伴の家の行く末の事なども、父はあれまで、心を悩まして居た。おれも考えれば、たまらなくなつて来る。其で、氏人を集めて諭したり、歌を作つて訓諭して見たりする。だがそうした後の気持ちの爽やかさは、どうしたことだ。洗い去つた様に、心が、すつとしてしまふのだった。まるで、初めから家の事など考えて居なかつた、

とおなじすがすがしい心になつてしまふ。

あきらめと言う事を、知らなかつた人ばかりではないか。……昔物語りに語られる神でも、人でも、傑すぐれた、と伝えられる限りの方々は——。それに、おれはどうしてこうだろう。

家持の心は併し、こんなに悔恨に似た心持ちに沈んで居るに繋つながらず、段々気にかかるものが、薄らぎ出して来ている。

ほう　これは、京きょう極きはてまで来た。

朱雀大路も、ここまで来ると、縦横に通る地割りの太い路筋ばかりが、白々として居て、どの区画にも区画にも、家は建つて居ない。去年の草の立ち枯れたのと、今年生えて稍やや莖やを立て初めたのとがまじりあつて、屋敷地から喰はみ出し、道の上までも延びて居

る。

こんな家が――。

驚いたことは、そんな草原の中に、唯一つ大きな構えの家が、建ちかかつて居る。遅い朝を、もう余程、今日の為事しごとに這入はいつたらしい木の道の者たちが、骨組みばかりの家の中で、立ちはたらいて居るのが見える。家の建たぬ前に、既に屋敷廻りの地じぎょう形が出て来て、見た目にもさっぱりと、垣をとり廻して居る。土を積んで、石に代えた垣、此頃言い出した築土垣つきひじがきというのは、此だな、と思つて、じつと目をつけて居た。見る見る、そうした新しい好尚このみのおもしろさが、家持の心を奪うてしまった。

築土垣の処々に、きりあけた口があつて、其に、門が出来て居た。

そうして、其処から、頻りに人が繋つては出て来て、石を曳く。木を搬つ。土を搬び入れる。重苦しい石城。懐しい昔構え。今も、家持のなくなしたくなく考えている屋敷廻りの石垣が、思うてもたまらぬ重圧となつて、彼の胸に、もたれかかつて来るのを感じた。

おれには、だが、この築土垣を扱ることが出来ぬ。

家持の乗馬は再、憂鬱に閉された主人を背に、引き返して、五条まで上つて来た。此辺から、右京の方へ折れこんで、坊角を廻りくねりして行く様子は、此主人に馴れた資人たちにも、胸の測られぬ気を起させた。二人は、時々顔を見合せ、目くばせをしながら尚、了解が出来ぬ、と言うような表情を交しかわし、馬

の後を走つて行く。

こんなにも、變つて居たのかねえ。

ある坊角に來た時、馬をぴたと止めて、独り言のように言つた。

……旧草ふるくさに新草にひくさまじり、生ひば 生ふるかに——だな。

近頃見つけた歌かぶしよ舞所の古記録「東歌あずまうた」の中に見た一首がふと、

此時、彼の言いたい気持ちをも、代作して居てくれていたように、
思ひ出された。

そうだ。「おもしろき野ぬをば 勿な焼きそ」だ。此でよいのだ。

げげんな顔を仰あおむけけている伴人ともびとらに、柔和な笑顔を向けた。

そうは思わぬか。立ち朽くさりになつた家の間に、どしどし新しい

屋敷が出来て行く。都は何時までも、家は建て詰まぬが、其で

もどちらかと謂えば、減るよりも殖えて行っている。此辺は以前、今頃になると、蛙めの、あやまりたい程鳴く田の原が、続いてたもんだ。

おつしゃ

仰るとおりで御座ります。春は蛙、夏はくちなわ、秋は蝗いなごまる。此辺はとても、歩けたところでは、御座りませんでした。

今一人が言う。

建つ家もたつ家も、この立派さは、まあどうで御座りましょう。其に、どれも此も、此頃急にはやり出した築つきひじがき土垣を築きまわしまして。何やら、以前とはすっかり変った処に、参った気が致します。

馬上の主人も、今まで其ばかり考えて居た所であった。だが彼の

心は、瞬間明るくなつて、先年みかたのおおきみ三形王の御殿での宴うたげに誦うたんだ即興が、その時よりも、今はつきりと内容を持つて、心に浮んで来た。

うつり行く時見る毎に、心疼いたく 昔の人し 思ほゆるかも

目をあげると、東の方春日の杜もりは、谷陰になつて、ここからは見えぬが、御蓋山みかさ・高円山たかまど一帯、頂が晴れて、すばらしい春日はるびよ和りになつて居た。

あきらめがさせるのどけさなのだ、とすぐ気がついた。でも、彼の心のふさぎのむしは迹あとを潜めて、唯、まるで今歩いているのが、大日本平城京おおやまとへいせいけいの土ではなく、大唐長安の大道の様な錯覚の起つて来るのが押えきれなかつた。此馬がもつと、毛並みのよい純

白の馬で、跨またがつて居る自身も亦、若々しい二十代の貴公子の気がして来る。神々から引きついであつた、重苦しい家の歴史だの、夥おびただしい数の氏人などから、すっかり截きり離されて、自由な空にかけて居る自分でもあるような、豊かな心持ちが、暫らくは払つても払つても、消えて行かなかつた。

おれは若くもなし。第一、海東の大日本人おおやまとびとである。おれには、憂鬱ゆううつな家職が、ひしひしと、肩のつまるほどかかつて居るのだ。こんなことを考えて見ると、寂しくはかない気もするが、すぐに其は、自身と関係のないことのように、心は饒にぎわしく和らいで来て、為方がなかつた。

おい、汝われたち。大伴氏上家うじのかみけも、築土垣を引き廻そうかな。

とんでもないことを仰せられます。

二人の声が、おなじ感情から迸り出した。ほとばし

年の増した方の資人とねりが、切実な胸を告白するように言った。

私どもは、御譜第では御座りません。でも、大伴と言うお名は、みかどみかき御門御垣と、関係深い称とよえだ、と承つて居ります。大伴家から

して、門垣を今様にする事になって御覧ごころうじませ。御一族の末々

まで、あなた様をお呪のろい申し上げることでおざりましょう。其

どころでは、御座りません。第一、ほかの氏々——大伴家より

も、ぐんと歴史の新しい、人の世になって初まった家々の氏人

までが、御一族を蔑ないがしろに致すことになりました。

こんな事を言わして置くと、折角澄みかかった心も、又曇つて来

そんな気がする。家持は忙あわてて、資人の口を緘とめた。

うるさいぞ。誰に言う語だと思つて、言つて居るのだ。やめぬか。雑じょうだん談だ。雑談を真に受ける奴が、あるものか。

馬はやつぱり、しつとしつとと、歩いて居た。築土垣 築土垣。
又、築土垣。こんな何時の間に、家構えが替つて居たのだろう。
家持は、なんだか、晩おそかれ早かれ、ありそんな気のする次の都——
—どうやらこう、もつとおつぴらいた平野の中の新京城にでも、
来ているのでないかと言う気が、ふとしかかったのを、危く喰いとめた。

築土垣 築土垣。もう、彼の心は動かなくなつた。唯、よいとする気持ちと、よくないと思おうとする意思との間に、気分だけが、

あちらへ寄りこちらへよりしているだけであつた。

何時の間にか、平群へぐりの丘や、色々な塔を持った京西の寺々の見渡される、三条辺の町尻に来て居ることに気がついた。

これはこれは。まだここに、残つていたぞ。

珍しい発見をしたように、彼は馬から身を翻かえしておりた。二人の資人はすぐ、馳かけ寄つて手綱を控えた。

家持は、門と門との間に、細かい柵さくをし囲めぐらし、目隠めかくしに枳からたち殻ばなの叢生やぶを作つた家の外構えの一個処ところに、まだ石城しきが可なり広く、人丈にあまる程に築いてあるそばに、近寄つて行つた。

荒れては居るが、ここは横佩牆よこはきかきつ内だ。

そう言つて、暫らく息を詰めるようにして、石垣の荒い面を見入

つて居た。

そうに御座ります。此石城からしてついた名の、横佩墻内だと申しますとかで、せめて一ところだけは、と強いてとり毀こぼたないとか申します。何分、帥そつの殿のお都入りまでは、何としても、このまま此儘で置くので御座りましょう。さように、人が申し聞けました。はい。

何時の間にか、三条七坊まで来てしまっていたのである。

おれは、こんな処へ来ようと言う考えはなかったのに——。だが、やっぱり、おれにはまだまだ、若い色好みの心が、失せないで居るぞ。何だか、自分で自分をなだめる様な、反省らしいものが出て来た。

其にしても、静か過ぎるではないか。

さようで。で御座りますが、郎女いらつめのお行くえも知れ、乳母もそちらへ行つたとか、今も人が申しましたから、落ちついたので御座りましょう。

詮索ずきそうな顔をした若い方が、口を出す。

いえ。第一、こんな場合は、騒ぐといけません。騒ぎにつけこんで、悪い魂たまや、霊ものが、うようよとつめかけて来るもので御座ります。この御館みたちも、古いおところだけに、心得のある長老おとなの一人や、二人は、難波へも下らずに、留守に居るので御座りましょう。

もうよいよい。では戻ろう。

十

おとめの閨戸ねやどをおとなう風ふうは、何も、珍しげのない国中の為来しきたりであつた。だが其にも、曾かつてはそうした風の、一切行われて居なかつたことを、主張する村々があつた。何時のほどにか、そうした村が、他村の、別々に守つて来た風習と、その古い為来りとをふり替へることになつたのだ、と言う。かき上る段になれば、何の雑作もない石城だけれど、あれを大昔からとり廻して居た村と、そうでない村とがあつた。こんな風に、しかつめらしい説明をする宿老とねたちが、どうかすると居た。多分やはり、語部などの昔語

りから、来た話なのであろう。踏み越えても這入れ相に見える石垣だが、大昔交された誓いで、目に見えぬ鬼神ものから、人間に到るまで、あれが形だけでもある限り、入りこまぬ事になっている。こんな約束が、人と鬼ものとの間にあつて後、村々の人は、石城の中に、ゆつたりと棲すむことが出来る様になつた。そうでない村々では、何者でも、垣を躍り越えて這入つて来る。其は、別の何かの為方で、防ぐ外はなかつた。祭りの夜でなくても、村なかの男は何の憚はばかりなく、垣を踏み越えて処女の薨しとみど戸をほとほと叩く。石城を囲うた村には、そんなことは、一切なかつた。だから、美くわし女めの家に、奴隷やつこになつて住みこんだ古いにしえの貴あてびともあつた。娘の父にこき使われて、三年五年、いつか処女に会われよう、と忍び

過した、身にしむ恋物語りもあるくらいだ。石城を掘り崩すのは、何処からでも鬼神もに入りこんで来い、と呼びかけるのと同じことだ。京の年よりもあつたし、田舎の村々では、之を言い立てに、ちつとでも、石城を残して置こうと争うた人々が、多かつたのである。

そう言う家々では、実例として恐しい証拠を挙げた。卅年も昔、

——天平八年嚴命くだが降つて、何事も命令のはかばかしく行われぬのは、朝臣ちようしんが先つて行われぬからである。汝等みましたち進んで、石城しきを

毀こぼつて、新京の時世装に叶うた家作りに改めよと、仰せ下された。

藤氏四流の如き、今に旧態を易かえざるは、最其位かに在るを顧みざるものぞ、とお咎とがめが降くだつた。此時一度、凡すべて、石城はとり毀たれ

たのである。ところが、其と時を同じくして、もがさ瘡瘡がはやり出した。越えて翌年、益々盛んになつて、四月北家を手初めに、京家・南家と、主人から、まず此時疫じえきに亡くなつて、八月にはとうとう、式家のうまかいきよう宇合卿までたお仆れた。家に、防ぐ筈の石城が失せたからだど、天下中の人騒さわいだ。其でまた、とり壊した家も、ぼつぼつもと旧に戻したりしたことであつた。

こんなすさまじい事も、あつて過ぎた夢だ。けれどもまだ、まざまざと人の心に焼きついて離れぬ、うつつ現の恐しさであつた。

其は其として、昔から家の娘を守つたむらむら邑々も、段々えたいの知れぬ村の風かまに感染かまけて、忍しのび夫づまの手に任せほうだい傍題ほうだいにしようとしてゐる。そうした求つまどい婚こんの風を伝えなかつた氏々の間では、此は、

忍び難い流行であつた。其でも男たちは、のどかな風俗を喜んで、何とも思わぬようになった。が、家庭の中では、母・妻・乳母^{おも}たちが、いまだにいきり立つて、そうした風儀になつて行く世間を、呪^{のろ}いやめなかつた。

手近いところで言うても、大伴宿禰^{すくね}にせよ。藤原朝臣^{あそん}にせよ。そう謂^いう妻どいの式はなくて、数十代宮廷をめぐつて、仕えて来た邑々のあるじの家筋であつた。

でも何時か、そうした氏々の間にも、妻迎への式には、

八千矛の神のみことは、とほ／＼し、高志^{こし}の国に、美し女^{くわめ}をありと聞かして、賢^{さか}し女^めをありと聞^{きこ}して……

から謡い起す神語^{かみがたりうた}歌を、語部に歌わせる風が、次第にひろま

つて来るのを、防ぎとめることが出来なくなつて居た。

南家の郎女なんけいらつめにも、そう言う妻つま覓ぎ人が——いや人ひと群むれが、とり

まいて居た。唯、あの型ばかり取り残された石城の為に、何だか

屋敷へ入ることが、物忌み——たぶう——を犯すような危殆ひあいな心

持ちで、誰も彼も、柵さくまで又、門まで来ては、かいまみしてひき

還かえすより上の勇氣が、出ぬのであつた。

通かよわせ文ぶみをおこすだけが、せめてものでだてで、其さえ無事に、

姫の手に届いて、見られていると言う、自信を持つ人は、一人と

してなかつた。事実、大抵、女部屋の老女とじたちが、引つたくつて

渡させなかつた。そうした文のとりつきをする若人——若女房——を

呼びつけて、荒けなく叱つて居る事も、度々見かけられた。

おもと
 其方は、この姫様こそ、藤原の氏神にお仕え遊ばす、清らかな
 とこおとめ
 常処女と申すのだ、と言うことを知らぬのかえ。神の咎めを
 はばか
 憚るがええ。宮から恐れ多いお召しがあつてすら、ふつにおい
 らえを申しあげぬのも、それ故だとは考えつかぬげな。やくた
 い者。とつとと失せたがよい。そんな文とりついで手を、
 いざか
 率
 川の一の瀬で浄めて来くさろう。罰知らずが……。

こんな風に、わなりつけられた者は、併し、二人や三人ではなかつた。
 よこはぎけ
 横佩家の女部屋に住んだり、通うたりしている若人は、
 一人残らず一度は、経験したことだと謂つても、うそではなかつた。

だが、郎女は、ついに一度そんな事のあつた様子も、知らされず

に來た。

上つ方の郎女が、才ざえをお習い遊ばすと言うことが御座りましよ
うか。それは近代ちかつよ、ずっと下しもさまのおなごの致すことと承り
ます。父君がどう仰おつしやろうとも、父御様ててごいのお話は御一代。お家の
習しは、神さまの御意趣おもむね、とお思いつかわされませ。

氏の掟おきての前には、氏うじのかみ上うじのかみたる人の考えをすら、否みとおす事も
ある姥うばたちであつた。

其老女たちすら、郎女の天稟てんぴんには、舌を捲まきはじめて居た。

もう、自身たちの教えることもうなつた。

こう思い出したのは、数年も前からである。内に居る、身狭乳母むさのちおも
・桃花鳥野乳母つきぬのま・波田坂上刀自はたのさかのえのとし、皆故知らぬ喜びの不安から、

歎息たんそくし続けていた。時々伺いに出る中臣志斐姫なかとみのしいのおむな・三上みかみの
みづごりのとしじめ水凝刀自女なども、来る毎、目を見合せて、ほうつとした顔を
 する。どうしよう、と相談するような人たちではない。皆無言で、
 自分等の力の及ばぬ所まで来た、姫の魂の成長にあきれて、目を
 みはるばかりなのだ。

才を習うなと言うなら、まだ聞きも知らぬこと、教えて賜たまれ。
 素直な郎女の求めも、姥たちにとっては、骨を刺しとおされるよ
 うな痛さであった。

何を仰せられます。以前から、何一つお教えなど申したこと
 がおざりましようか。目下の者が、目上のお方さまに、お教え
 申すと言うような考えは、神様がお聞き届けになりません。教

える者は目上、ならう者は目下、と此が、神の代からの掟でござりまする。

志斐姫の負け色を救う為に、身狭乳母も口を挿む^{はき}。

唯知った事を申し上げるだけ。其を聞きながら、御心がお育ち遊ばす。そう思うて、姥たちも、覚えただけの事は、郎女様のみ魂^{たま}を揺る様^{いぶ}にして、歌いもし、語りもして参りました。教えなど仰つては私めらが罰を蒙^{こうむ}らなければなりません。

こんな事をくり返して居る間に、刀自たちにも、自分らの恃^{たの}む知識に対する、単純な自覚が出て来た。此は一層、郎女の望むままに、才を習した方が、よいのではないか、と言う気が、段々して来たのである。

まことに其為には、ゆくりない事が、幾重にも重つて起つた。姫の帳台の後から、遠くに居る父の心尽しだつたと見えて、二巻のおんなで女手の写経らしい物が出て来た。姫にとつては、肉縁はないが、曾祖母にも当る橘夫人たちばなの法華経、又其御胎おほらにいらせられる——筋がつきろから申せば、大叔母御にもお当り遊ばす、今の皇太后様の楽毅論ん。此二つの巻物が、美しい装いで、棚を架いた上に載せてあつた。

横佩大納言と謂われた頃から、父は此二部を、自分の魂のように大事にして居た。ちよつと出る旅にも、大きやかな箱に納めて、一人分の資人とねりの荷として、持たせて行つたものである。其魂の書物を、姫の守りに留めておきながら、誰にも言わずにいたのであ

る。さすがに我がづよ強い刀自たちも、此見覚えのある、美しい箱が出て来た時には、暫らく撲うたれたように、顔を見合せて居た。そうして後のち、後あとで恥しかろうことも忘れて、皆声をあげて泣いたものであつた。

郎女は、父の心入れを聞いた。姥たちの見る目には、併し予期したような興奮は、認められなかつた。唯一途いちずに素直に、心の底の美しさが匂い出たように、静かな、美しい眼で、人々の感激する様子を、驚いたように見まわして居た。

其からは、此二つの女手の「本」を、一心に習いとおした。偶然に友を誘ひくものであつた。一月も立たぬ中の事である。早く、此都に移つて居た飛鳥寺あすかであら——元興寺がんこうじ——から卷数かんずが届けられた。其

には、難波にある帥そつの殿の立願りゆうがんによつて、仏前に読誦とくしやうした経文の名目が、書き列つらねてあつた。其に添えて、一卷の縁起文が、此御館へ届けられたのである。

父藤原豊成朝臣、亡父贈太政大臣七年の忌みに当る日に志を発おこして、書き綴つた「仏本伝来記」を、其後二年立つて、元興寺へ納めた。飛鳥以来、藤原氏とも関係の深かつた寺なり、本尊なのである。あらゆる念願と、報謝の心を籠こめたもの、と言うことは察せられる。其一卷が、どう言う訣わけか、二十年もたつてゆくりなく、横佩家へ戻つて来たのである。

郎女の手に、此巻が渡つた時、姫は端近く膝行いざり出て、元興寺の方を礼拝した。其後で、

難波とやらは、どちらに当るかえ。

と尋ねて、示す方角へ、活き活きした顔を向けた。其目からは、
珠数の珠のたま水すい精しゅうのような涙が、こぼれ出ていた。

其からと言うものは、来る日もくる日も、此元興寺の縁起文を手
写した。内典・外典其上に又、大日本おおやまとびとなる父の書いた文もん。

指から腕、腕から胸、胸から又心へ、沁しみ沁じみと深く、魂を育て
る智慧の這入はいつて行くのを、覚えたのである。

大日本おおやまと日高見ひたかみの国。国々に伝わるありとある歌うた 諺ことわざ、又其旧もとつ

辞ごと。第一には、中臣の氏の神語り。藤原の家の古物語り。多く

の語り詞かたごとを、絶えては考え継ぐ如く、語り進んでは途切れ勝ちに、
呪のろ々しく、くねくねしく、独り語りする語部や、乳母おもや、嚼母ま

たちの唱える詞が、今更めいて、寂しく胸に蘇よみがえつて来る。

おお、あれだけの習しを覚える、ただ其だけで、此世に生きながらえて行かねばならぬみずからであつた。

父に感謝し、次には、尊い大叔母君、其から見ぬ世の曾祖母おおおばみことの尊に、何とお礼申してよいか、量り知れぬものが、心にたぐり上げて来る。だがまず、父よりも誰よりも、御礼申すべきは、み仏である。この珍貴うづの感覚さとりを授け給う、限り知られぬ愛めぐみに充ちたよき人が、此世界の外に、居られたのである。郎女いらつめは、塗香ずこうをとり寄せて、まず髪に塗り、手に塗り、衣かおを薰るばかりに匂わした。

ほほき　ほほきい　ほほほきい――。

きのうよりも、澄んだよい日になった。春にしては、驚くばかり濃い日光が、地上にかつきりと、木草の影を落して居た。ほかほかした日よりなのに、其を見ていると、どこか、薄ら寒く感じるほどである。時々過ぎる雲の翳りもなく、晴れきった空だ。高原を拓いて、間引いた疎らな木原の上には、もう沢山の羽虫が出て、のぼったり降ったりして居る。たった一羽の鶯が、よほど前から一処を移らずに、鳴き続けているのだ。

家の刀自たちが、物語る口癖を、さつきから思い出して居た。出いずものすくね雲宿禰の分れの家の嬢子が、多くの男の言い寄るのを煩しがつ

て、身をよけよけして、何時か、山の林の中に分け入った。そうして其処で、まどろんで居る中に、悠々うらうらと長い春の日も、暮れてしまった。嬢子は、家路と思う径みちを、あちこち歩いて見た。脚は茨いばらとげの棘にさされ、袖そでは、木の楚ずわえにひき裂かれた。そうしてとうとう、里らしい家群いえむらの見える小高い岡の上に出た時は、裳きも、着物ものも、肌の出るほど、ちぎれて居た。空には、夕月が光りを増して来ている。嬢子はさくり上げて来る感情を、声に出した。

ほほき　ほほきい。

何時も、悲しい時に泣きあげて居た、あの声ではなかった。「お此身は」と思った時に、自分の顔に触れた袖は袖ではないものであった。枯かれ原ふの冬草の、山肌色をした小な翼であった。思い

がけない声を、尚も出し続けようとする口を、押えようすると、自身すらいとおしんで居た柔らかな唇は、どこかへ行つてしまつて、替りに、ささやかな管のような喙くちばしが来てついて居る——。悲しいのか、せつないのか、何の考えさえもつかなくつた。唯、身み悶もだえをした。するとふわりと、からだは宙に浮き上つた。留めようと、袖をふれば振るほど、身は次第に、高く翔かけり昇つて行く。五日月の照る空まで……。その後、今の世までも、

ほほき　ほほきい　ほほほきい。

と鳴いているのだ、と幼い耳に染みつけられた、物語りの出雲の嬢子が、そのまま、自分であるような気がして来る。

郎女は、徐しずかに両袖もろそでを、胸のあたりに重ねて見た。家に居た時

よりは、褻なれ、皺立しわだつて居るが、小鳥の羽には、なつて居なかつた。手をあげて唇に触れて見ると、喙くちばしでもなかつた。やつぱり、ほつとりとした感触を、指の腹に覺えた。

ほほき鳥——鶯——になつて居た方がよかつた。昔語りの嬢子は、男を避けて、山の楚しもとはら原へ入り込んだ。そうして、飛ぶ鳥になつた。この身は、何とも知れぬ人の倂おもかげにあくがれ出て、鳥にもならず、ここにこうして居る。せめて蝶飛虫ちようとりにでもなれば、ひらと空に舞いのぼつて、あの山の頂へ、倂おもかげびとをつきとめに行こうもの——。

ほほき ほほきい。

自身の咽喉のどから出た声だ、と思つた。だがやはり、廬いおりの外で鳴く

のであつた。

郎女の心に動き初めた叡さとい光りは、消えなかつた。今まで手習いした書卷の何処かに、どうやら、法喜と言う字のあつた気がする。法喜——飛ぶ鳥すらも、美しいみ仏の詞に、感かまけて鳴くのではなからうか。そう思えば、この鶯も、

ほほき ほほきい。

嬉しそうな高音を、段々張つて来る。

物語りする刀自たちの話でなく、若人らの言うことは、時たま、世の中の瑞みずみず々しい消しょう息そくを伝えて来た。奈良の家の女部屋は、裏方五つ間を通した、広いものであつた。郎女の帳台の立ち処どを一番奥にして、四つの方に、刀自・若人、凡およそ三十人も居た。若人

等は、この頃、氏々の御館みたちですることだと言つて、苑そのの池の蓮の茎を切つて来ては、藕はすいと糸を引く工夫に、一心になつて居た。横佩家の池の面を埋めるほど、珠を捲まいたり、解けたりした蓮の葉は、まばらになつて、水の反射が蔀しとみを越して、女部屋まで来るばかりになつた。茎を折つては、纖維を引き出し、其片糸を幾筋も合せては、糸に縊よる。

郎女は、女たちの凝つている手芸を、じつと見て居る日もあつた。ほうほうと切れてしまう藕糸を、八合・十二合・二十合はたこに縊よつて、根気よく、細い綱の様にする。其を績うみ麻おの麻おごけに繋つなぎためて行く。奈良の御館でも、蚕かうしは飼つて居た。實際、刀自たちは、夏は殊にせわしく、そのせいで、不機嫌になつて居る日が多かつた。

刀自たちは、初めは、そんな韓からの技人てびとのするような事は、と目もくれなかつた。だが時が立つと、段々興味を惹ひかれる様子が見えて来た。

こりや、おもしろい。絹の糸と、績み麻との間を行く様な妙な糸の——。此で、切れさえしなければのう。

こうして績つむぎ蓄ためた藕糸は、皆ひとまと一纏ひとまとめにして、寺々に納めよう

と、言うのである。寺には、其それぞれ々それぞれの技女ぎじよが居て、其糸もろこで、唐

土しやう様しやうと言うよりも、天竺てんじく風ふうな織物おりものに織りあげる、と言う評判

であつた。女たちは、唯功德の為に糸を績いでいる。其でも、其が幾かせ、幾たまと言う風たまに貯たまつて来ると、言い知れぬ愛あい著ちやく

を覚えて居た。だが、其がほんとは、どんな織物になることやら、

其処までは想像も出来なかつた。

若人たちは莖を折つては、巧みに糸を引き切らぬように、長く長くと抽き出す。又其、粘り気の少いさくいものを、まるで絹糸を縫り合せるように、手際よく糸にする間も、ちつとでも口やめる事なく、うき世語りなどをして居た。此は勿論、貴族の家庭では、出来ぬ掟おきてになつて居た。なつては居ても、物珍ものめでする盛りの若人たちには、口を塞ふさいで緘黙しじま行を守ることが、死ぬよりもつらい行であつた。刀自らの油断を見ては、ぼつぼつ話をしてゐる。其きれぎれが、聞こうとも思わぬ郎女の耳にも、ぼつぼつ這入はいつて来勝ちなのであつた。

鶯の鳴く声は、あれで、法華經ほけきょう法華經ほけきょうと云うのじやて――。

ほう、どうして、え——。

天竺のみ仏は、おなごは、助からぬものじやと、説かれ説かれして来たがえ、其果てに、女おなごでも救う道が開かれた。其を説いたのが、法華経じやと言うげな。

——こんなこと、おなごの身で言うのと、さかしがりよと思おうけれど、でも、世間では、そう言うもの——。

じやで、法華経法華経と経の名を唱えるだけで、この世からして、あの世界の苦しみが、助かるといの。

ほんまにその、天てんじく竺のおなごが、あの鳥に化なり変つて、み経の名を呼ぶるのかえ。

郎いらつめ女には、いつか小耳はさに挿はさんだ其話が、その後、何時までも消

えて行かなかつた。その頃ちようど、しょうさんじようどぶつししうじゆぎよ称讚浄土仏撰受
 経かうを、千部写そうとの願をおこ発して居た時であつた。其が、はか
 どらぬ。何時までも進まぬ。茫ぼうとした耳に、此世よばなし話が再また、
まぎ紛れ入つて来たのであつた。
 ふつと、こんな気がした。

ほほき鳥は、先の世で、おんきよう御経手写の願を立てながら、え果
 さいで、死にでもした、いとしい女子がなつたのではなからう
 か。……そう思えば、も若しや今、千部に満たずにしまうような
 ことがあつたら、我が魂たまは何になることやら。やっぱり、鳥か、
 虫にでも生れて、切なく鳴き続けることであろう。

ついに一度、ものを考えた事もないのが、此国のあて人の娘であ

つた。磨かれぬ智慧を抱いたまま、何も知らず思わずに、過ぎて行つた幾百年、幾万の貴いによし女しょう性せいの間に、蓮はちすの花がほつちりと、つぼみ蒼もたを擡もたげたように、物を考えることを知り初そめた郎女であつた。

おれよ。鶯よ。あなかま姦かまや。人に、物思ひをつけくさる。

荒々しい声と一しよに、立つて、表戸と直角かねになつた草壁しとみの蔀しとみ

戸どをつきあげたのは、当麻語部たぎまのかたりおむなの媼おむなである。北側に当るらしい

其外側は、牕まどを圧するばかり、篠竹しのだけが繁つて居た。沢山の葉筋

が、日をすかして一時にきらきらと、光つて見えた。

郎女は、暫らく幾本とも知れぬその光りの筋の、閃ひらめき過ぎた色を、

瞼まぶたの裏うらに、見つめて居た。おとといの日の入り方、山の端に見た

輝きらきが、思わずには居られなかつたからである。

また一時、廬堂を廻つて、音するものもなかつた。日は段々闌けて、小昼の温みが、ほの暗い郎女の居処にも、ほつとりと感じられて来た。

寺の奴が、三四人先に立つて、僧綱が五六人、其に、大勢の所化たちのとり捲いた一群れが、廬へ来た。

これが、古山田寺だ、と申します。

勿体ぶつた、しわがれ声が聞えて来た。

そんな事は、どうでも——。まず、郎女さまを——。

噛みつくようにあせて居る家長老額田部子古のがなり声でした。

同時に、表戸は引き剥がされ、其に隣つた、幾つかの豎薦をひ

きちぎる音がした。

ずうと這い寄つて来た身狭乳母は、郎女の前に居たけを聳かして、
 掩おおいになつた。外光の直射を防ぐ為と、一つは、男たちの前、殊
 には、庶民の目に、貴人あてびとの姿を暴さらすまい、とするのであろう。
 伴ともに立つて来た家人けにんの一人が、大きな木の又また枝ぶりをへし折つて来
 た。そうして、旅用意の巻帛まきぎぬを、幾垂れか、其場で之に結び下
 げた。其を牀ゆかにつきさして、即座の豎帷たつばり―几帳きちょう―は調つた。
 乳母おもは、其前に座を占めたまま、何時までも動かなかつた。

十二

怒りの滝のようになった額田部子古は、奈良に還かえつて、公に訴え
ると言い出した。大和国にも断つて、寺の奴ばらを追い払つて貰
うとまで、いきまいた。大師を頭かしらに、横佩家に深い筋合いのある
貴族たちの名をあげて、其方々からも、何分の御吟味を願わずに
は置かぬ、と凄しい顔をして、住じゅうりよ侶たちを脅おそかした。郎女は、
貴族の姫で入らせられようが、寺の淨域けがを穢けがし、結界まで破られ
たからは、直にお還りになるようには計われぬ。寺の四至の境に
在る所で、長期の物忌みして、その贖あがないはして貰わねばならぬ、
と寺方も、言い分はひっこめなかつた。

理分に非分にも、これまで、南家の権勢でつき通してきた家長おとな老
等にも、寺方の扱いと言うものの、世間どおりにはいかぬ事が訣わか

つて居た。乳母に相談かけても、一代そう言う世事に与つた事のない此人は、そんな問題には、詮かない唯の女によし性に過ぎなかつた。

先刻さつきからまだ立ち去らずに居た当麻語部の嫗が、口を出した。

其は、寺方が、理分でおざるがや。お随おしたがいなされねばならぬ。

其を聞くと、身狭乳母は、激しく、田舎語部の老女を叱りつけた。男たちに言いつけて、畳にしがみつぎ、柱にかきすが継ふるる古ばば婆つかを掴み出させた。そうした威高さは、さすがに自おのずから備そつつていた。

何事も、この身などの考えではきめられぬ。帥そつの殿とのに承う承けらうにも、国遠し。まず姑しばし、郎女様のお心による外はないもの、と

思おもいまする。

其より外には、方もつかかなかつた。奈良の御館みたちの人々と言つても、多くは、此人たちの意見を聴いてする人々である。よい思案を、考えつきそうなものも居ない。難波へは、直様、使いを立てることにして、ともかくにも、当座は、姫の考えに任せよう、と言ふことになつた。

郎女様。如何お考え遊ばします。おして、奈良へ還れぬでも御座りませぬ。もつとも尤、寺方でも、候さぶらいびと人や、奴隸やつこの人数を揃えて、妨げましよう。併し、御館のお勢いには、何程の事でも御座りませぬ。では御座りますが、お前さまのお考えを承らずには、何とも計いかねます。御思案もらお洩し遊ばされ。

謂いわば、難題である。あて人の娘御に、出来よう筈のない返答で

ある。乳母おほもも、子古およそも、凡は無駄な伺いだ、と思つては居た。ところか、郎女の答えは、木魂返こだまがえしの様に、躊躇ためらうことなしにあつた。其上、此ほどはつきりとした答えはない、と思われる位、凜りんとしていた。其が、すべての者の不満を圧倒した。

姫の咎とがは、姫が贖う。此寺、此二上山の下に居て、身の償い、

心の償いした、と姫が得心するまでは、還るものとは思やるな。郎女の声・詞ことばを聞かぬ日はない身狭乳母ではあつた。だがつかしか此ほどに、頭の髓しまで沁み入るような、さえぎえとした語を聞いたことのない、乳母ちおもだつた。

寺方の言い分に譲るなど言う問題は、小い事であつた。此爽さわやかな育ての君の判断力と、惑いなき詞に感じてしまった。ただ、涙。

こうまで賢さかしい魂を窺うかがい得て、頬に伝うものを拭うことも出来なかつた。子古にも、郎女の詞を伝達した。そうして、自分のまだ會かつて覚えたことのない感激を、力深くつけ添えて聞かした。

ともあれ此上は、難波津なにわづへ。

難波へと言つた自分の語に、気づけられたように、子古は思い出した。今日か明日、新羅しらぎ問罪の為、筑前へ下る官使の一行があつた。難波に留つてゐる帥の殿も、次第によつては、再太宰府へ出向かれることになつてゐるかも知れぬ。手遅れしては一大事である。此足ですぐ、北へ廻つて、大阪越えから河内へ出て、難波まで、馬の叶う処は馬で走ろう、と決心した。

万法蔵院に、唯一つ飼つて居た馬の借用を申し入れると、此は快

く聴き入れてくれた。今日の日暮れまでには、立ち還りに、難波へ行つて来る、と齒のすいた口に叫びながら、郎女の豎帷に向けて、庭から匍伏ほつくした。

子古の発つた後は、又のどかな春の日に戻つた。悠々うらうらと照り暮す山々を見せましよう、と乳母が言い出した。木立ち・山陰から盗み見する者のないように、家人らを、一町・二町先まで見張りに出して、郎女を、外に誘い出した。

暴風雨あらしの夜、添そうのしも下・広瀬・葛城の野山を、かちあるきした娘御ではなかつた。乳母と今一人、若人の肩に手を置きながら、歩み出た。日の光りは、霞みもせず、陽かげろう炎も立たず、唯おどんで見えた。昨日跳めた野も、斜になつた日を受けて、物の影が細長

く靡なびいて居た。青垣の様にとりまく山々も、愈々遠く裾を曳ひいて見えた。早い葦すみれ―げんげ―が、もうちらほら咲いている。遠く見ると、その赤々とした紫が一続きに見えて、夕焼け雲がおりて居るように思われる。足もとに一本、おなじ花の咲いているのを見つけた郎女いらつめは、膝くさむらを叢むらについて、じつと眺め入った。

これはえ——。

すみれ、と申すとのことで御座ります。

こう言う風に、物を知らせるのが、あて人に仕える人たちの、為きた来りきたになつて居た。

蓮はちすの花に似ていながら、もつと細やかな、——絵にある仏の花を見るような——。

ひとり言しながら、じつと見ているうちに、花は、広い萼うてなの上に乗った仏の前の大きな花になって来る。其がまた、ふつと、目の前のささやかな花に戻る。

夕風が冷ひやついて参ります。内へと遊ばされ。

乳母が言った。見渡す山は、皆影濃くあざやかに見えて来た。

近々と、谷を隔てて、端山の林や、崖なぎの幾重も重つた上に、二上の男おのかみ岳の頂が、赤い日に染つて立っている。

今日は、又あまりに静かな夕ゆうべである。山ものどかに、夕雲の中に這はい入つて行こうとしている。

もうしもうし。もう外に居る時では御座りません。

十三

「朝目よく」うるわしい兆しるしを見た昨日は、郎女いらつめにとつて、知らぬ経験を、後から後から展ひらいて行つたことであつた。ただ人びとの考えから言えば、苦しい現実のひき続きではあつたのだが、姫にとつては、心驚く事ばかりであつた。一つ一つ變つた事に逢う度に、「何も知らぬ身であつた」と姫の心の底の聲が揚つた。そうして、その事毎に、挨拶をしてはやり過したい気が、一ぱいであつた。今日も其続きを、くわしく見た。

なごり惜しく過ぎ行く現うつし世よのさまさま。郎女は、今日を閉じて、心に一つ一つ収めこもうとして居る。ほのかに通り行き、將著はたし

くはためき過ぎたもの——。宵闇の深くならぬ先に、いおり廬のまわり
 は、すっかり手入れがせられて居た。灯台も大きなのを、寺から
 借りて来て、こうこう煌々と、あぶらび油火が燃えて居る。明王像も、女人の
 お出での場処には、すさまじいと言う者があつて、どこかへはこ搬
 で行かれた。其よりも、郎女の為には、帳台の設備しつらわれている安
 らかさ。今宵は、夜も、暖かであつた。帷帳とばりを周めぐらした中は、ほ
 の暗かつた。其でも、山の鬼神も、野の魍魎もを避ける為の灯の渦が、
 ぼうと梁はりに張り渡した頂板つしいたに揺めいて居るのが、たのもししい気
 を深めた。帳台のまわりには、乳母や、若人が寝たらしい。其も
 もう、一時ひとときも前の事で、皆すやすやと寢息の音を立てて居る。姫
 の心は、今は軽かつた。たとえば、おもかげ梯に見たお人には逢わずとも、

その佛を見た山の麓ふもとに来て、こう安らかに身を横えて居る。

灯台の明りは、郎女の額の上に、高く朧おぼろに見える光りの輪を作つて居た。月のように円くて、幾つも上へ上へと、月輪がちりんの重つている如くも見えた。其が、隙間風の為であろう。時々薄れて行くと、一つの月になった。ぼうつと明り立つと、幾重にも隈くまの畳まった、大きな円まどかな光明になる。

幸福に充ちて、忘れて居た姫の耳に、今宵も谷の響きが聞え出した。更けた夜空には、今頃やつと、遅い月が出たことであろう。物の音。——つた つたと来て、ふうと佇たち止るけはい。耳をすますと、元の寂しずかな夜に、——激たぎち降くだる谷のとよみ。

つた つた つた。

又、ひたと止む^や。

この狭い廬の中を、何時まで歩く、^{あしおと}蹠音だろう。

つた。

郎女は刹那^{せつな}、思い出して帳台の中で、身を固くした。次にわじわ

じと戦^{おの}きが出て来た。

^{あめわかみこ}天若御子——。

ようべ、^{たぎまのかたりのおむな}当麻語部^{あまのこ}姫の聞いた物語り。ああ其お方の、来て

^{うかが}窺う夜なのか。

——青馬の^{みくものとし}耳面刀自。

刀自もがも。女弟^{おと}もがも。

その子の はらからの子の

おとめご
処女子の 一人

一人だに わが配偶^{つま}に来よ

まことに畏^{おそろ}しいと言うことを覚えぬ郎女にしては、初めてまざまざと、圧^{おさ}えられるような畏^{こわ}さを知った。あああの歌が、胸に生き蘇^{かえ}つて来る。忘れたい歌の文句が、はつきりと意味を持って、姫の唱えぬ口の詞^{ことば}から、胸にとおつて響く。乳房^{ほとぼし}から迸り出ようとするとときめき。

帷帳がふわと、風を含んだ様に皺^{しわ}だむ。

ついと、凍る様な冷氣——。

郎女は目を瞑^{つぶ}った。だが——瞬間^{まつけ}睫の間から映った細い白い指、まるで骨のような——帷帳^{つか}を掴んだ片手の白く光る指。

なも 阿^あ弥^み陀^だほとけ。あなたふと 阿^あ弥^み陀^だほとけ。

何の反省もなく、唇を洩^もれた詞。この時、姫の心は、急に寛^{くつろ}ぎを感じた。さつと——汗。全身に流れる冷さを覚えた。畏い感情を持ったことのないあて人の姫は、直^{すぐ}に動^{どう}顛^{てん}した心を、とり直すことが出来た。

のうのう。あみだほとけ……。

今一度口に出して見た。おとといまで、手写しとおした、称讚淨土^{もん}経の文が胸に浮ぶ。郎女は、昨日までは一度も、寺道場を覗いたこともなかった。父君は家の内に道場を構えて居たが、簾^{すだれ}越しにも聴聞は許されなかった。御^{おん}経^{きよう}の文は手写しても、固^{もと}より意趣は、よく訣^{わか}らなかつた。だが、処々には、かつがつ気持ちの

汲みとれる所があつたのであろう。さすがに、まさかこんな時、突嗟とつさに口に上ろう、とは思つて居なかつた。

白い骨、譬たとえば白玉の並んだ骨の指、其が何時までも目に残つて居た。帷帳は、元のままに垂れて居る。だが、白玉の指ばかりは細々と、其に絡んでゐるような気がする。

悲しさとも、懐しみとも知れぬ心に、深く、郎女は沈んで行つた。山の端に立つた倂びびとは、白しろ々とした掌をあげて、姫をさし招いたと覺えた。だが今、近々と見る其手は、海の渚の白玉のように、からびて寂しく、目にうつる。

長い渚を歩いて行く。郎女の髪は、左から右から吹く風に、あち

らへ靡なびき、こちらへ乱れする。浪なみはただ、足もとに寄せている。渚なかつみちと思うたのは、海の中道である。浪は、両方から打つて来る。どこまでもどこまでも、海の道は続く。郎女の足は、砂を踏んでゐる。その砂すらも、段々水に掩おおわれて来る。砂を踏む。踏むと
 思うて居る中に、ふと其が、白々とした照る玉だ、と気がつく。姫は身を屈こごめて、白玉を拾う。拾うても拾うても、玉は皆、掌たなそこに置くと、粉の如く砕けて、吹きつける風に散る。其でも、玉を拾い続ける。玉は水隠みかくれて、見えぬ様になつて行く。姫は悲しさに、もろ手を以て掬すくおうとする。掬むすんでも掬すくんでも、水のように、手た股なまたから流れ去る白玉——。玉が再、砂の上につぶつぶ並んで見える。忙あわたたしく拾おうとする姫の俯うつむいた背を越して、流れる浪が、

泡立つてとおる。

姫は——やつと、白玉を取りあげた。輝く、大きな玉。そう思うた刹那、郎女の身は、大浪にうち仆たおされる。浪に漂う身……衣もなく、裳ももない。抱き持った等身の白玉と一つに、水の上に照り輝く現うつし身み。

ずんずんと、さがつて行く。水底みなぞこに水漬みづく白玉なる郎女の身は、やがて又、一幹ひとつもとの白い珊瑚さんごの樹である。脚を根、手を枝とした水底の木。頭に生い靡なびくのは、玉藻であつた。玉藻が、深海のうねりのままに、揺れて居る。やがて、水底にさし入る月の光り——。ほつと息をついた。

まるで、潜かすきする海女が二十尋・三十尋の水底から浮び上つて嘯うそぶ

く様に、深い息の音で、自身明らかに目が覚めた。

ああ夢だった。当麻たぎままで来た夜道の記憶は、まざまざと残つて居るが、こんな苦しさは覚えなかつた。だがやつぱり、おとこの道の続きを辿たどつて居るらしい気がする。

水の面からさし入る月の光り、そう思うた時は、ずんずん海面に浮き出て来た。そうして悉ことごとく、跡形もない夢だった。唯、姫の仰ぎ寝る頂つし板いたに、ああ、水にさし入つた月。そこに以前のままに、幾つかさも暈かきの畳たたまつた月輪の形が、揺めいて居る。

のうのう 阿弥あみ陀だほとけ……。

再、口に出た。光りの暈は、今は愈いよいよ々明りを増して、輪と輪との境の隈くま々くましい処までも見え出した。黒ずんだり、薄暗く見え

たりした隈が、次第に凝り初めて、明るい光明の中に、胸・肩・頭・髪、はつきりと形を現じた。白々と袒いだ美しい肌。淨く伏せたまみが、郎女の寝姿を見おろして居る。かの日の夕、山の端に見た^{おもかげ}倂びと——。乳のあたりと、膝元とにある手——その指、白玉の指。姫は、起き直った。天井の光りの輪が、元のままに、ただ^{ほの}仄かに、事もなく揺れて居た。

十四

貴人は^{うまびと}うま人どち、やつこは^{やつこ}奴隸どち、と言うからの——。何時見ても、大師は、^{みじん}微塵曇りのない、^{まじど}円かな^{そうごう}相好である。其

に、ふるまいのおおどかなこと。若くからうじのかみ氏上で、数十家けの一族や、日本國中数万の氏人から立てられて来た家持も、じつとむこ対うていると、その静かな威に、圧せられるような気がして来る。言いわしておくがよい。奴隸たちは、とやかくと口さがないのが、其しごと為事よ。此身とお身とは、おなじ貴人じや。おのずから、話も合おうと言うもの。此身が、段々のぼなり上ると、うま人までがおのずとやつこ心になり居つて、いやねた嫉むの、そねむの。

家持は、此が多聞天か、と心に問いかけて居た。だがどうも、そうは思われぬ。同じ、かたどつて作るなら、とついれんそう聯想が逸そて行く。八年前、越中国から帰つた当座の、世の中の豊かな騒さわぎが、思い出された。あれからすぐ、大仏開眼供養が行われたので

あつた。其時、近々と仰ぎ奉つた尊容、八十種好具足した、と謂いわれる其相好が、誰やらに似ている、と感じた。其がその時は、どうしても思い浮ばずにしまった。その時の印象が、今ぴつたり、的てきにあてはまつて来たのである。

こうして対いあつて居る主人の顔なり、姿なりが、其ままあの盧る遮那さなほとけの倂はなだ、と言つて、誰が否いなもう。

お身も、少し咄はなしたら、ええではないか。官位こうぶりはこうぶり。

昔ながらの氏は氏——。なあ、そう思わぬか。紫徵しびちゆうだい中台うちの、

兵部省のと、位づけるのは、うき世の事だわ。家うちに居る時だけ

は、やはり神代以来の氏上づきあいあいが、ええ。

新しい唐の制度の模倣ばかりして、漢土もろこしの才ざいが、やまと心に入

り替つたと謂いわれて居る此人が、こんな嬉しいことを言う。家持は、感謝したい気がした。理會者・同感者を、思いもうけぬ処に見つけ出した嬉しさだったのである。

お身は、宋玉や、王おうほう褒の書いた物を大分持つて居ると言うが、

太宰府へ行つた時に、手に入れたのじやな。あんな若い年で、

わせだつたのだのう。お身は――。お身の氏では、古こまろ麻呂。身

の家に近しい者でも奈良麻呂。あれらは漢魏かんぎはおろか、今の唐

の小説なども、ふり向きもせんから、言うがない話じやわ。

兵部大輔は、やつと話のつきほを捉えた。

お身さまのお話じやが、わしは、賦の類には飽きました。どう

もあれが、この四十面さげてもまだ、涙もろい歌や、詩の出

来る元になつて居る——そうつくづく思いますじゃて。ところで近頃は、方かたを換えて、張文成を拾い読みすることにしました。この方が、なんぼか——。

大きに、其は、身も賛成じゃ。じゃが、お身がその年になつても、まだ二十代はたちの若い心や、瑞々みずみずしい顔を持つて居るのは、宋玉のおかげじゃぞ。まだなかなか隠れては歩き居るお、と人の噂じゃが、嘘じゃなからう。身が保証する。おれなどは、張文成ばかり古くから読み過ぎて、早く精気の尽きてしもうた心持ちがする。——じゃが全く、文成はええのう。あの仁じんに会うて来た者の話では、猪肥いのこえのした、唯の漢土びとじゃったげなが、心はまるで、やまとのものと、一つと思うが、お身なら、

うべの
諾うてくれるだろうの。

文成に限る事ではおざらぬが、あちらの物は、読んで居て、知らぬ事ばかり教えられるようで、時々ふつと思り返すと、こんな思わざった考えを、いつの間にか、持っている——そんな空恐しい気さえすることが、あります。お身さまにも、そんな経験は、おありでがな。

大ありお有り。毎日毎日、其よ。しまいに、どうなるのじゃ。こんなな智慧づいては、と思われてならぬことが——。じゃが、おみなご女子だけには、まず当分、女部屋のほの暗い中で、こんな智慧づかぬ、のどかな心で居させたいものじゃ。第一其が、われわれ男の為じやて。

家持は、此了解に富んだ貴人に向つては、何でも言つてよい、青年のような気が湧いて来た。

さようさよう。智慧を持ち初めては、あの鬱いぶせい女部屋には、じつとして居ませぬげな。第一、横よこはきかきつ佩墻内の――

此はいけぬ、と思つた。同時に、此臆おくれた氣の出るのが、自分を卑ひくくし、大伴氏を、昔の位置から自ら蹶けおと落す心なのだ、と感じる。

好ええ、好ええ。遠慮はやめやめ。氏上づきあいじやもの。ほい又出た。

おれはまだ、藤原の氏上に任せられた訣わけじやあ、なかつたつけの。

瞬間、暗い顔をしたが、直にさつと眉の間から、輝きが出て来た。身の女めい姪いが神隠しにおうたあの話か。お身は、あの謎見たいな

いきさつを、そう解^とるかね。ふん。いやおもしろい。女姪の姫も、定めて喜ぶじやろう。実はこれまで、内々消息を遣して、小あたりにあたつて見た、と言う口かね、お身も大きに。

今度は軽い心持ちが、大胆に押勝の話を受けとめた。

お身さまが経験^{ためし}ずみじやで、其で、郎女の才^{ざい}高さ^{だか}と、男扱^{わか}び
 することが訣^{わか}りますな——。

此は——。額^{ぬか}さまに切りつけるぞ——。免^{ゆる}せ免^{ゆる}せと言うところ

じやが、——あれはの、生れだちから違^{ちが}うものな。藤原の氏姫
 じやからの。枚^{ひら}岡^{おか}の斎^{いっ}姫^{ひめ}にあがる宿世^{すくせ}を持つて生れた者ゆ
 え、人間の男は、弾^はく、弾^はく、弾^はきとばす。近^{ちか}よるまいぞよ。

ははははは。

大師は、笑いをぴたりと止めて、家持の顔を見ながら、きまじめな表情になつた。

じゃがどうも——。聴き及んでのことと思うが、家出の前まで、阿弥陀経の千部写経をして居たと言うし、がつぎろん樂毅論から、兄の

殿の書いた元興寺縁起も、其前に手習いしたらしいし、まだまだ孝経などは、これぼっちの頃に習うた、と言うし、なかなかおなごはかせの女博士での。楚辞そじや、小説にうき身をやつす身や、お身は

近よれぬわのう。霜月・師走の垣かいこほちおなご毀雪女じゃもの。——どうして、其だけの女子おみなごが、神隠しなどに逢おうかい。

第一、場処が、あの当麻で見つかったと言いますからの——。

併し其は、藤原に全く縁のない処でもない。天あめ二上ふたかみは、中な

かとみのよごと

臣かみ寿詞じゆにもあるし……。齋いつ姫ひめもいや、人の妻と呼ばれる

のもいや——で、尼になる氣を起したのでないか、と考えると、もう不安で不安でう。のどかな氣持ちばかりでも居られぬて

——。

押勝の眉は集つて来て、皺しわ一つよせぬ美しい、この老い見えぬ貴人の顔も、思いなし、ひずんで見えた。

何しろ、嫺たわやめ女は国の宝じやでう。出来ることなら、人の物

にはせず、神の物にしておきたいところじやが、——人間の高望みは、そうばかりもさせてはおきおらぬがい——。ともかく、むぎむぎ尼寺へやる訣わけにはいかぬ。

じゃが、お身さま。一人出家すれば、と云う詞ことばが、この頃はやりになつて居りますが…。

九族が天に生じて、何になるというのじゃ。宝は何百人かかつて、作り出せるものではないぞよ。どだい兄公殿あにきどのが、少しほとけご仏凝りが過ぎるでう——。自然内うちうらまで、そんな氣風がしみこむようになったかも知れぬぞ——。時に、お身のみ館の郎女いらつめも、そんな育てはしてあるまいな。其では、家の久須麻呂うちが泣きを見るからの。

人の悪いからかい笑みを浮べて、話を無理にでも脇へ釣り出そうと努めるのは、考えるのも切ない胸の中が察せられる。

兄公殿は氏上に、身は氏うじのすけ助すけと言う訣なのじゃが、肝腎かんじん齋さい

き姫で、枚岡に居させられる叔母御は、もうよい年じや。去年春日祭りに、女使いで上られた姿を見て、神さびたものよ、と思うたぞ。今一代も此方から進ぜなかつたら、齋き姫になる娘の多い北家の方が、すぐに取つて替つて、氏上に据るは。

兵部大輔にとつても、此はもう、他事ひとごとではなかつた。おなじ大伴幾流の中から、四代続いて氏上職を持ち堪こたえたのも、第一は宮廷の御恩徳もあるが、世の中のよせが重かつたからである。其には、一番大事な条件として、美しい齋き姫が、後から後と此家に出で、とぎれることがなかつた為でもある。大伴の家のは、表向きむこ堀むこどりさえして居ねば、子があつても、齋き姫は勤まる、と言いう定めであつた。今の阪上さかのうえの郎女いらつめは、二人の女子おみなごを持つて、

やはり齋いつき姫である。此は、うっかり出来ない。此方こちらも藤原同様、叔母御が齋いつき姫で、まだそんな年でない、と申うているが、又どんなことで、他流の氏姫が、後を襲うことにならぬとも限らぬ。大伴・佐伯ささえきの数知れぬ家々・人々が、外の大伴へ、頭をさげるようになってはならぬ。こう考えて来た家持の心の動揺などには、思いよりもせぬ風で、

こんな話は、よそほかの氏上に言うべきことでないが、兄公殿がああして、此先何年、難波にいても、太宰府に居ると言うが表面おもてだから、氏の祭りは、枚岡・春日と、二処に二度ずつ、其外、週まわり年には、時々鹿島・香取あずまじの東路あずまじのはてにある旧もとやし社の祭りまで、此方で勤めねばならぬ。実際よそほかの氏上

よりも、此方の氏助ははたらいしているのだが、——だから、自分で、氏上の気持ちになつたりする。——もう一層なつてしまふかな。お身はどう思う。こりや、答える訣にも行くまい。氏上に押し直ろうとしたところで、今の身の考え一つを枉まげさせるものはない。上様方に於かせられて、お叱りの御沙汰を下しおかれぬ限りは——。

京中で、此惠美屋敷ほど、庭を嗜たしなんだ家はないと言う。門は、左京二条三坊に、北に向いて開いて居るが、主人家族の住いは、南を広く空けて、深々とした山齋やまが作つてある。其に入りこみの多い池を周めぐらし、池の中の島も、飛鳥の宮風に造られて居た。東の中なかみ門かど、西の中み門まで備つて居る。どうかすると、庭と申そう

より、寛^{かんかん}々とした空き地の広くおありになる宮よりは、もっと手入れが届いて居そうな気がする。

庭を立派にして住んだ、うま人たちの末々の様が、兵部大輔の胸に來た。瞬間、憂^{ゆううつ}鬱な気持ちがかぶさつて來て、前にいる大師の顔を見るのが、氣の毒な様に思われる。

案じるなよ。庭が行き届き過ぎて居る、と申うてるのだろう。

そんなことはないさ。庭はよくても、亡びた人ばかりはないさ。

淡海公の御館はどうだ。どの筋でも引き継がずに、今に荒してはあがるが、あの立派さは。それあの山部の何とか言つた、地下^{じげ}の召し人の歌よみが、おれの三十になつたばかりの頃、「昔見^{ふる}し旧き堤は、年深み……年深み、池の渚^{なぎさ}に、水草生^{みくさ}ひにけり」

とよんだ位だが、其後が、これ此様に、四流にも岐わかれて栄えて
 いる。もつとあるぞ——。なに、庭などによるものじゃないわ。
 待たのむ所の深い此あて人は、庭の風景の、目立つた個処個処を指摘
 しながら、其抛なる所を、日本やまと・漢もろこし土わたくしに涉わたつて説明した。
 長い廊を、数人の童わらわが続いて来る。

日ひずかしです。お召しあがり下されましょう。

改かつて、簡単な饗きやう応おうの挨拶をした。まろうどに、早く酒を献
 じなさい、と言っている間に、美しい采女うねめが、盃を額より高く捧
 げて出た。

おお、それだけ受けて頂けばよい。舞いぶりを一つ、見て貰い
 なさい。

家持は、何を考えても、先を越す敏感な主人に対して、唯虚心で居るより外は、なかつた。

うねめは、大伴の氏上へは、まだくださらぬのだったね。藤原では、存知でもあろうが、先例が早くからあつて、淡海公が、近江の宮から頂戴した故事で、頂く習慣になつて居ります。

時々、こんな畏かしこまつたもの言いもまじえる。兵部大輔は、自身の語ことばづかいにも、初しよ中終ちゆう、気扱あいをせねばならなかつた。

氏上もな、身が執心で、兄公殿を太宰府へ追いまくつて、後にすわろうとするのだ、と言う奴があるといの——。やつぱり「奴はやつこどち」じやの。そう思うよ。時に女め姪いの姫だが——。

さすがの聡明そうめい第一の大師も、酒の量は少かつた。其が、今日は幾分いけた、と見えて、話が循環して来た。家持は、一度はぐらかされた緒いとぐち口に、とりついた気で、

よこはきかきつ

横佩牆内の郎女は、どうなるでしょう。社・寺、それとも宮

——。どちらへ向いても、神さびた一生。あつたら惜しいものでおありだ。

氣にするな。氣にするな。氣にしたとて、どう出来るものか。

此は——もう、人間の手へは、戻らぬかも知れんぞ。

末は、独り言になつて居た。そうして、急に考え深い目を凝した。池へ落した水音は、未ひつじがさがると、寒々と聞えて来る。

早く、躑躅つづじの照る時分になつてくれぬかなあ。一年中で、この

庭の一番よい時が、待ちどおしいぞ。

大師藤原惠美押勝朝臣の声は、若々しい、純な欲望の外、何の響きもまじえて居なかつた。

十五

つた つた つた。

郎女は、一向ひたすら、あの音の歩み寄つて来る畏おそろしい夜更けを、待つ

ようになつた。おとといよりは昨日、昨日よりは今日という風に、

其あしおと躑あしおと音が間遠むこになつて行き、此頃はふつに音せぬようになつた。

その氷の山むこに對むこうて居るような、骨の疼うずく戦せん慄りつの快感、其が失

せて行くのを虞おそれるように、姫は夜毎、鶏おそのうたい出すまでは、殆、祈る心で待ち続けて居る。

絶望のまま、幾晩も仰ぎ寝たきりで、目は昼よりも寤さめて居た。

其間に起る夜の間の現象には、一切心が留らなかつた。現にあれほど、郎女の心を有頂天に引き上げた頂板つしの面おもての光り輪にすら、

明盲あきじいのように、注意は惹ひかれなくなつた。ここに来て、疾とくに、

七日は過ぎ、十日・半月になつた。山も、野も、春のけしきが整うて居た。野のいばら茨の花のようだった小桜が散り過ぎて、其に次ぐ

山桜が、谷から峰かけて、断続しながら咲いているのも見える。

麦原むぎのふは、驚くばかり伸び、里人の野しごと為事に出た姿が、終日、その

あたりに動いている。

都から来た人たちの中、何時までこの山陰に、春を起き臥すことか、と侘わびる者が殖えて行つた。廬いおり堂どうの近くに掘り立てた板屋に、こう長びくとは思わなかつたし、まだどれだけ続くかも知れぬ此生活に、家ある者は、妻子に会うことばかりを考えた。親に養われる者は、家の父母の外にも、隠れた恋人を思う心が、切々として来るのである。女たちは、こうした場合にも、平気に近い感情で居られる長い暮しの習しに馴れて、何かと為事を考えてはして居る。女方の小屋は、男のとは別に、もっと廬に接して建てられて居た。

身狭むさのち乳母おもの思いやりから、男たちの多くは、唯さえ小人数な奈良の御館みたちの番に行け、と言つて還かえされ、長老おとな一人の外は、唯雑ぞう用よう

をすする童と、やつこ 奴隸位しか残らなかつた。

おも 乳母や、若人たちも、薄々は帳台の中で夜を久しく起きている、

いらつめ 郎女の様子を感じ出して居た。でも、なぜそう夜深く溜め息つ

いたり、うなされたりするか、知る筈のない昔かたぎの女たちである。

やはり、郎女の魂たまがあくがれ出て、心が空しくなつて居るものと単純に考えて居る。ある女は、魂たまごいの為に、山尋ねの咒術おこないをして見たらどうだろう、と言つた。

乳母は一口に言い消した。姫様、たぎま 当麻に御安あんちやく 著やく なされた其夜、

奈良の御館へ計わずに、私にした当麻真人の家人たちの山尋ねが、わるい結果を呼んだのだ。当麻語部とか謂いつたまじもの 蟲物使いのよう

な婆が、出しゃばつての差配が、こんな事を惹き起したのだ。

その節、山の峠たわの塚で起つた不思議は、噂になつて、この貴人うまびと一

家の者にも、知れ渡つて居た。あらぬ者の魂を呼び出して、郎女

様におつけ申しあげたに違いない。もうもう、軽はずみな咒術は

思いとまることにしよう。こうして、魂たまの游離あくがれ出た処の近くに

さえ居れば、やがては、元のお身になり戻り遊されることだろう。

こんな風に考えて、乳母は唯、気長に気ながに、と女たちを諭し

諭した。こんな事をして居る中に、早一月も過ぎて、桜の後、

暫らく寂しかった山に、躑躅つづじが燃え立った。足も行かれぬ崖の上

や、巖の腹などに、一群ひとむら一群咲いて居るのが、奥山の春は今だ、

となのつて居るようである。

ある日は、山へ山へと、里の娘ばかりが上つて行くのを見た。およそ凡
数十人の若い女が、何処で宿つたのか、其次の日、てんでに赤い
山の花を髪にかざして、降りて来た。廬の庭から見あげた若女房
の一人が、山の躑躅林が練つて降るようだと声をあげた。

ぞよぞよと廬の前を通る時、皆頭をさげて行つた。其中の二三人
が、つくねんとして暮す若人たちの慰みに呼び入れられて、板屋
の端へ来た。当麻の田居も、今は苗代時なわしろどきである。やがては田植
えをする。其時は、見に出やしやれ。こんな身でも、其時はずん
と、おなごぶりが上るぞな、と笑う者もあつた。

ここの田居の中で、植え初めの田は、腰折れ田と言うて、都ま
でも聞えた物語りのある田じゃげな。

若人たちは、又例のまじものうば蟲物姥の古語りであろう、とまぜ返す。ともあれ、こうして、山ごもりに上った娘だけに、今年の田の早処女が当ります。其しるしが此じや、と大事そうに、頭の躑躅に觸れて見せた。

もつと変つた話を聞かせぬかえと誘われて、身分に高下はあつても、同じ若い同士のこととて、色々ないなかばなし田舎咄をして行つた。其を後にのち乳母たちが聴いて、気にしたことがあつた。山ごもりして居ると、小屋の上の崖をどうどうと踏みおりて来る者がある。ようべ、真夜中のことである。一樣にうなされて、苦しい息をついていると、音はそのまま、真下へ真下へ、降つて行つた。がらがらと、岩の崩くえる響き。——ちようど其が、此盧堂の真上の高たか処

に當つて居た。こんな処に道はない筈じゃが、と今朝起きぬけに見ると、案の定、赤岩の大崩崖おおなき。ようべの音は、音ばかりで、ちつとも痕あとは残つて居なかつた。

其で思い合せられるのは、此頃ちよくちよく、子ねから丑うしの間に、里から見えるこのあたりの峰おの上に、光り物がしたり、時ならぬいつときおろし。一時いつときおろし風うなの凄うない唸うなりが、聞えたりする。今までついに聞かぬこ

と。里人は唯こう、恐れ謹しんで居る、とも言つた。

こんな話を残して行つた里の娘たちも、苗代田の畔あぜに、めいめいのかざしの躑躅花を挿して歸つた。其は昼のこと、田舎は田舎らしいねや閨ねやの中に、今は寝ついたであろう。夜はひた更けに、更けて行く。

昼の恐れのかなごりに、寝苦しがつて居た女たちも、おびえ疲れに寝入ってしまった。頭上の崖で、寝鳥の鳴き声がした。郎女は、まどろんだとも思わぬ目を、ふつと開いた。続いて今ひと響き、びしとしたのは、鳥などの、翼ぐるめひき裂かれたらしい音である。だが其だけで、山は音どころか、生き物も絶えたように、虚しい空間の闇に、時間が立つて行つた。

郎女の額ぬかの上の天井の光の暈かきが、ほのぼのと白んで来る。明りの隈くまはあちこちに偏倚かたよつて、光りを豎たてにくぎつて行く。と見る間に、ぱつと明るくなる。そこに大きな花。蒼白すみれい莖すみれ。その花びらが、幾つにも分けて見せる隈、仏の花の青蓮華しょうれんげと言うものであろうか。郎女の目には、何とも知れぬ浄きよらかな花が、車輪のように、

宙にぱつと開いている。仄ほのぐら暗い葦しべの処ところに、むらむらと雲のよう
に、動くものがある。黄金の葦しべをふりわけける。其は黄金の髪であ
る。髪の中から匂い出た莊嚴な顔。閉じた目が、憂いを持って、
見おろして居る。ああ肩・胸・頸あわな肌。——冷え冷えとした白
い肌。おお おいとおいしい。

郎女は、自身の声に、目が覚めた。夢から続いて、口は尚夢のよ
うに、語を逐おうて居た。

おいとおしい。お寒かろうに——。

十六

山の躑躅の色は、様々ある。一つ色のものだけが、一時に咲き出して、一時に萎しほむ。そうして、凡一月は、後から後から替つた色のが匂い出て、禿はげた岩も、一冬のうら枯れをとり返さぬ柴木しばきや山まも、若夏の青雲の下に、はでなかざしをつける。其間に、藤の短い花房が、白く又紫に垂れて、古い木の幹の高さを、せつなく、寂しく見せる。下草に交つて、馬酔木あしびが雪のように咲いても、花めいた心を、誰に起させることもなしに、過ぎるのがあわれである。

もう此頃になると、山は厭いとわしいほど緑に埋れ、谷は深々と、繁りに隠されてしまう。郭公かつこうは早く鳴き噎からし、時ほととぎす鳥が替つて、日も夜も鳴く。

草の花が、どつと怒濤どとうの寄せるように咲き出して、山全体が花原見たようになって行く。里の麦は刈り急がれ、田の原は一様に青みわたって、もうこんな伸びたか、と驚くほどになる。家の庭そ苑のにも、立ち替り咲き替って、栽うえ木き、草花が、何処まで盛り続けるかと思われる。だが其も一盛りで、坪はひそまり返ったような時が来る。池には葦が伸び、蒲がまが秀ほき、藷いが抽ぬんで来る。遅々として、併し忘れた頃に、俄にわかに伸のし上るように育つのは、蓮の葉であつた。

前年から今年にかけて、海の彼方の新羅の暴状が、目立って棄て置かれぬものに見えて来た。太宰府からは、軍船を新造して新羅

征伐の設けをせよ、と言う命のお降しくだしを、度々都へ請うておこして居た。此忙しい時に、偶然流人太宰員外帥だざいいんがいのそつとして、難波に居た横佩家よこはきけの豊成は、思いがけぬ日々を送らねばならなかつた。

都の姫の事は、千古の口から聴いて知つたし、又、京・難波の間を往来する頻繁な公私の使いに、文をことづてる事は易かつたけれども、どう処置してよいか、途方に昏くれた。ちよつと見は何でもない事の様で、実は重大な、家の大事である。其だけに、常の優柔不断な心癖は、益々つのるばかりであつた。

寺々の知音に寄せて、当麻寺へ、よい様に命じてくれる様に、と書いてもやった。又処置方について伺うた横佩墻内の家の長老とね・刀自とじたちへは、ひたすら、汝等の主の郎いらつめ女を護つて居れ、と言

うような、抽象風なことを、答えて来たりした。

次の消息には、何かと具体した仰せつけがあるだろう、と待つて居る間に、日が立ち、月が過ぎて行くばかりである。其間にも、姫の失われたと見える魂が、お身に戻るか、其だけの望みで、人々は、山村に止つて居た。物思いに、屈託ばかりもして居ぬ若人たちは、もう池のほとりにおり立つて、伸びた蓮の茎を切り集め出した。其を見て居た寺の婢めやつこ女が、其はまだ若い、もう半月もおかねばと言つて、寺領の一部に、蓮根を取る為に作つてあつた蓮はちすだ田へ、案内しよう、と言ひ出した。あて人の家自身が、それぞれ、農村の大家おおよけであつた。其が次第に、官人つかさびとらしい姿にかわ更つて来ても、家庭の生活には、何時までたつても、何処か農家

らしい様子が、残つて居た。家構えにも、屋敷の広場にわにも、家中の雑用具ぞうようぐにも。第一、女たちの生活は、起居たちいふるまいなり、服装なりは、優雅に優雅にと變つては行つたが、やはり昔の農家の家内やうちの匂いまよがつき纏まとうて離れなかつた。刈り上げの秋になると、夫と離れて暮す年頃に達した夫人などは、よく其家の遠いなりどこ田莊らへ行つて、数日を過して来るような習しも、絶えることなく、くり返されて居た。

だから、刀自たちは固もとより若人らも、つくねんと女部屋の薄暗がりに、明し暮して居るのではなかつた。てんでに、自分の出た村方の手芸を覚えて居て、其を、仕える君の為しいだに為出しそう、と出精してはたらいた。

裳もの襷ひだを作るのに珍ない術てを持った女などが、何でもないこと
とりわけ重宝がられた。袖そでの先につける鱮はたそで袖そでを美しく為立てて、
其に、珍しい縫いとりをする女なども居た。こんなのは、どの家
庭にもある話でなく、こう言う若人をおきあてた家は、一つのよ
い見てくれを世間に持つ事になるのだ。一般に、染めや、裁ち縫
いが、家々の顔見合わぬ女どうしの競技のように、もてはやされ
た。摺すり染めや、擣うち染めの技術も、女たちの間には、目立たぬ
進歩が年々にあつたが、浸ひで染めの為の染料が、韓てびとの技工人の影
響から、途方もなく変化した。紫と謂いつても、茜あかねと謂つても皆、
昔の様な、染め漿しおの処とりあつかい置かはせなくなつた。そうして、染め上
りも、艶々しく、はでなものになつて来た。表向きは、こうした

色の禁令が、次第に行きわたって来たけれど、家の女部屋までは、かみ官の目も届くはずはなかつた。

家庭の主婦が、居まわりの人を促したてて、自身も精励してする
よゝな為事は、あて人の家では、刀自等の受け持ちであつた。若
人たちも、田畠に出ぬと言うばかりで、家の中での為事は、まだ
まいりまみえ見参をせずにいた田舎暮しの時分と、大差はなかつた。とり
わけ違ふのは、其家々の神々に仕えると言う、誇りはあるが、小
むつかしい事がつけ加えられて居る位のことである。外出には、
下人たちの見ぬ様に、笠を深々とかずき、其下には、更に薄うすぎぬ帛
を垂らして出かけた。

いつとき一時たたぬ中に、婢女ばかりでなく、自身たちも、田におりた

つたと見えて、泥だらけになって、若人たち十数人は戻つて来た。皆手に手に、張り切つて発育した、蓮の茎を抱えて、廬いおりの前に並んだのには、常々くすりとも笑わぬ乳母おもたちさえ、腹の皮をよつて、切ながつた。

郎女様。御覧ごらうじませ。

豎たつぱり帳を手でのけて、姫に見せるだけが、やつとのことであつた。

ほう——。

何が笑うべきものか、何が憎むに値するものか、一切知らぬ上じょう。藟ろうには、唯常と變つた皆の姿が、羨うらやましく思われた。

この身も、その田居とやらにおり立ちたい——。

めつそうなこと、仰せられます。

めつそうな。きまつて、誇張した顔と口との表現で答えることも、此ごろ、この小社会で行われ出した。何から何まで縛りつけるよ
うな、身狭乳母むさのちおもに対する反感も、此ものまねで幾分、いり合せが
つく様な気がするのであろう。

其日からもう、若人たちの糸いと繕とよりは初まつた。夜は、閨ねやの闇の中
で寝る女たちには、稀まれに男の声を聞くこともある、奈良の垣内住かきつ
いが、恋しかつた。朝になると又、何もかも忘れたようになって
續うみ貯ためる。

そうした糸の、六かせ七かせを持って出て、郎女に見せたのは、
其数日後であつた。

乳母よ。この糸は、蝶鳥の翼よりも美しいが、蜘蛛くもの巣いより弱

く見えるがよ——。

郎女は、久しぶりでにつこりした。労を犒ねぎらうと共に、考えの足らぬのを憐むようである。刀自は、驚いて姫の詞ことばを堰せき止めた。

なる程、此は脆さく過ぎまする。

女たちは、板屋に戻つても、長く、健やかな喜びを、皆して語つて居た。

全く些すこしの悪意もまじえずに、言いたいままの気持ちから、

田居とやらへおりたきたい——、
を反覆した。

刀自は、若人を呼び集めて、

もつと、きれぬ糸を作り出さねば、物はない。

と言った。女たちの中の一人が、

それでは、刀自に、何ぞよい御思案が――。

さればの――。

昔を守ることばかりはいかついが、新しいことの考えは唯、よのつ尋常ねの婆の如く、愚かしかった。

ゆくりない声が、郎女の口から洩もれた。

この身の考えることが、出来ることか試して見や。

うま人を軽侮かるすることを、神への忌みとして居た昔人である。だが、かすかな軽かるしめに似た気持ちあふが、皆の心に動いた。

夏引きの麻生あふの麻あさを績むように、そして、もつと日ざらしよく、細くこまやかに――。

郎女は、目に見えぬもののさとしを、心の上で綴って行くように、語を吐いた。

板屋の前には、俄かに、蓮の茎が乾し並べられた。そうして其が乾くと、谷の澱みに持ち下りて浸す。浸しては晒し、晒しては水に漬でた幾日の後、筵の上で槌の音高く、こもこも、交々と叩き柔らげた。

その勤しみを、郎女も時には、端近くいざり出て見て居た。咎めようとしても、思いつめたような目して、見入って居る姫を見ると、刀自は口を開くことが出来なくなつた。

日晒しの茎を、八針に裂き、其を又、幾針にも裂く。郎女の物言わぬまなざしが、じつと若人たちの手もとをまもつて居る。果

ては、刀自も言い出した。

私も、續きましよう。

續きに續み、又續みに續んだ。藕糸はすいとのまるがせが、日に日に殖

えて、廬堂の中に、次第に高く積まれて行つた。

もう今日は、みな月に入る日じやの——。

暦の事を言われて、刀自はぎよつとした。ほんに、今日こそ、氷ひ室むろの朔日ついたちじや。そう思う下から齒の根のあわぬような悪感を覚

えた。大昔から、暦は聖ひじりあずかの与る道と考えて来た。其で、男女は唯、

長老の言うがままに、時の来又去つた事を教わつて、村や、家の行事を進めて行くばかりであつた。だから、教えぬに日月を語ることは、極めて聡さとい人の事として居た頃である。愈々いよいよ魂をとり

戻されたのか、と瞻まもりながら、はらはらして居る乳母おもであつた。
 唯、郎女いらつめは復また、秋分の日あきぶんの日の近づいて来て居ることを、心にと
 うよりは、身の内に、そくそくと感じ初めて居たのである。蓮は、
 池のも、田居いりのも、極度に長たけて、苔つぼみの大きくふくらんだのも、
 見え出した。婢女めやつこは、今が刈りしおだ、と教えたので、若人た
 ちは、皆手も足も泥にして、又田に立ち暮す日が続いた。

十七

彼岸中日 秋分の夕。朝曇り後晴れて、海のように深ふかみどり碧なに風
 いだ空に、昼過ぎて、白い雲が頻しきりにちぎれちぎれに飛んだ。其

が門渡る船と見えている内に、暴風である。空は愈々青澄み、昏くなる頃には、藍の様に色濃くなつて行つた。見あげる山の端は、横雲の空のように、茜色に輝いて居る。

おおやまおろし

大山風。木の葉も、枝も、顔に吹きつけられる程の物は、皆

活きて青かつた。板屋は吹きあげられそうに、煽りきしんだ。若

人たちは、悉く郎女の廬に上つて、刀自を中に、心を一つにして、

ひしと顔を寄せた。ただ互の顔の見えるばかりの緊張した気持ち

の間に、刻々に移つて行く風。西から真正面に吹きおろしたのが、

暫らくして北の方から落して来た。やがて、風は山を離れて、平

野の方から、山に向つてひた吹きに吹きつけた。峰の松原も、空

らざま

様に枝を掻き上げられた様になつて、悲鳴を続けた。谷から峰

の^へ上に生え上^{のぼ}つて居る萱原^{かやはら}は、一様に上へ上へと糶^せり昇るよう
に、葉裏を返して扱^こき上げられた。

家の中は、もう暗くなつた。だがまだ見える庭先の明りは、黄にかつきりと、物の一つ一つを、鮮やかに見せて居た。

郎女様が――。

誰かの声である。皆、頭の毛が空へのぼる程、ぎよつとした。其が、何だと言われずとも、すべての心が、一度に了解して居た。言い難い恐怖にかみずつた女たちは、誰一人声を出す者も居なかつた。

身狭乳母は、今の今まで、姫の側に寄つて、後から姫を抱えて居たのである。皆の人はけはいで、覚め難い夢から覚めたように、

目を見まわると、ああ、何時の間にか、姫は嫗おむなの両腕もろうで両膝の間には、居させられぬ。一時に、慟哭どうこくするような感激が来た。だが長い訓練が、老女の心を取り戻した。凜りんとして、反り返る様な力が、湧き上った。

誰たぞ、弓を——。鳴弦つるうちじや。

人を待つ間もなかった。彼女自身、壁代かべしろに寄せかけて置いた白木の檀弓まゆみをとり上げて居た。

それ皆の衆——。反閑あしづみぞ。もつと声高こわだかに——。あつし、あつし、それ、あつしあつし……。

若人たちも、一人一人の心は、疾とくに飛んで行ってしまつて居た。唯一つの声で、警けいひつ※を発し、反閑へんぱいした。

あつし あつし。

あつし あつし あつし。

狭い廬いおりの中を踏ふんで廻まつた。脇目からは、遶にようどう道どうする群れのよ
うに。

郎女様は、こちらに御座りますか。

万法蔵院の婢女が、息をきらして走つて来て、何時もなら、許されて居ぬ無作法で、近々と、廬みぎりの砌まに立つて叫んだ。

なに――。

皆の口が、一つであつた。

郎女様か、と思われるあて人が――、み寺の門かどに立つて居させるのを見たで、知らせにまいりました。

今度は、乳母一人の声が答えた。

なに、み寺の門に。

婢女を先に、行道の群れは、小石を飛す嵐の中を、早足に練り出した。

あつし あつし あつし ……。

声は、遠くからも聞えた。大風をつき抜く様な鋭声とこえが、野面のづらに伝わる。

万法蔵院は、実に寂せきとして居た。山風は物忘れした様に、鎮まつて居た。夕闇はそろそろ、かぶさつて来て居るのに、山裾のひらけた処を占めた寺庭は、白砂が、昼の明りに輝いていた。ここからよく見える二上の頂は、広く、赤々と夕映えている。

姫は、山田の道場の櫛まじから仰ぐ空の狭さを悲しんでいる間に、何時かここまで来て居たのである。浄域を穢けがした物忌みにこもっている身、と言うことを忘れさせぬものが、其でも心の隅にあつたのである。門の闕しきみから、伸び上るようにして、山の際はの空を見入つて居た。

暫らくおだやんで居た嵐が、又山に廻つたらしい。だが、寺は物

音もない黄昏たそがれだ。

男おのかみ岳めのかみと女めのかみ岳との間になだれをなした大きな曲線たわが、又次第に

両方へ聳そそつて行つている、此二つの峰の間の広い空際。薄れかかつた茜の雲が、急に輝き出して、白銀の炎をあげて来る。山の間まに充満して居た夕闇は、光りに照されて、紫だつて動きはじめた。

そうして暫らくは、外に動くもののない明るさ。山の空は、唯白々として、照り出されて居た。肌 肩 脇 胸 豊かな姿が、山の尾上の松原の上に現れた。併し、おもかげ 梯に見つづけた其顔ばかりは、ほの暗かつた。

今すこし著くしる み姿あらわ顕したまえ——。

郎女の口よりも、皮膚をつんざいて、あげた叫びである。山腹の紫は、雲となつてたなび 鬩き、次第次第に降さがる様に見えた。

明るいのは、山際ばかりではなかつた。地上は、砂いさごの数もよまれるほどである。

しずかに しずかに雲はおりて来る。万法蔵院の香殿・講堂・塔婆・楼閣・山門・僧房・庫裡くり、ことごと 悉く金に、朱に、青に、昼いちじるより著

く見え、自ら光りを発して居た。

庭の砂の上にすれすれに、雲は揺曳ようえいして、そこにありありと半身を顕した尊者の姿が、手にとる様に見えた。匂いやかな笑みを含んだ顔が、はじめて、まともに郎女に向けられた。伏し目に半ば閉じられた目は、此時、姫を認めたとように、清すずしく見ひらいた。軽くつぐんだ脣くちびるは、この女にょしょう性に向うて、物を告げてでも居るように、ほぐれて見えた。

郎女は尊さに、目の低たれて来る思いがした。だが、此時を過してはと思う一心で、御姿みすがたから、目をそらさなかつた。

あて人を讃えるものと、思いこんだあの詞ことばが、又心から迸ほとばしり出た。

なも 阿弥陀あみだほとけ。あなとうと 阿弥陀ほとけ。

瞬間に明りが薄れて行つて、まのあたりに見える雲も、雲の上の尊者の姿も、ほのぼのと暗くなり、段々に高く、又高く上つて行く。姫が、目送する間もない程であつた。忽たちまち、二上山の山の端に溶け入るように消えて、まつくらな空ばかりの、たなびく夜に、なつて居た。

あつし あつし。

足を踏み、前さきをお駆う声こゑが、耳もとまで近づいて来ていた。

十八

当麻たぎまの邑むらは、此頃、一本の草、一ひとくれ塊くれの石すら、光りを持つほど、

にぎわ
賑い充ちて居る。

たぎまのまひとけ

当麻真人家の氏神当麻彦の社へ、祭り時に外れた昨今、急に、

氏上の拝礼があつた。故かづさのかみおゆのまひと上総守老真人以来、暫らく絶えて居たことである。

其上、もうに二三日に迫つた八月はつきの朔日ついたちには、奈良の宮から、

勅使が来向われる筈になつて居た。当麻氏から出られただいふじん大夫人

のお生み申された宮の御代に、あらたまることになつたからであ

る。廬堂の中は、前よりは更に狭くなつて居た。郎女が、奈良の

御館みたちからとり寄せた高機たかはたを、設たてたからである。機織りに長たけ

た女も、一人や二人は、若人の中に居た。此女らの動かして見せ

るおさ箴ひや梭ひの扱い方を、姫はすぐに会得した。機に上つて日ねもす、

時には終よもすがら夜織つて見るけれど、蓮の糸は、すぐに円つぶになったり、断きれたりした。其でも、倦うまずにさえ織つて居れば、何時か織りあがるもの、と信じている様に、脇目からは見えた。

乳母ちおもは、人に見せた事のない憂わしげな顔を、此頃よくしている。

何しろ、唐土もろこしでも、天竺てんじくから渡つた物より手に入らぬ、という藕糸はすいと織りを遊ばそう、と言うのじゃものう。

話相手にもしなかつた若い者たちに、時々うっかりと、こんな事を、言う様になった。

こう糸が無駄になつては。

今の間にとしどし續つんで置かいでは――。

乳母の語に、若人たちは又、広々として野や田の面におり立つこ

とを思うて、心がさわだつた。そうして、女たちの刈りとつた蓮積み車が、いおり廬に戻つて来ると、何よりも先に、田居への降り道に見た、当麻の邑の騒ぎの噂である。

いらつめ郎女様のお従兄恵美の若子さまのお母様も、はら当麻真人のお出
じやげな——。

恵美の御館みたちの叔父君の世界、見るような世になつた。

兄御を、そつ帥の殿に落しておいて、御自身はのり越して、内相の、大師の、とおなりのぼりの御心持ちは、どうあろうのう——。
あて人に仕えて居ても、女はうっかりすると、人の評判に時を移した。

やめい やめい。お耳ざわりぞ。

しまいには、乳母が叱りに出た。だが、身狭むさのとじ刀自自身のうちにも、もだもだと咽喉のどにつまった物のある感じが、残らずには居なかつた。そうして、そんなことにかまけることなく、何の訣わけやら知れぬが、一心に糸を績み、機を織つて居る育ての姫が、いとおしくてたまらぬのであつた。

昼の中多く出た虻あぶは、潜んでしまつたが、蚊は仲秋になると、益々あばれ出して来る。日中の興奮で、皆は正体もなく寝た。身狭までが、姫の起き明す灯の明りを避けて、隅の物陰に、深いいびき軒を立てはじめた。

郎女は、断きれては織り、織つては断れ、手がだるくなつても、まだ梭ひを放そうともせぬ。

だが、此頃の姫の心は、満ち足りうて居た。あれほど、夜々よるよる見
て居たおもかげびと 人の姿も見ずに、安らかな気持ちが続いているので
ある。

「此機を織りあげて、はようあの素肌のお身を、おお 掩うてあげたい
。」

其ばかり考えて居る。世の中になし遂げられぬもののあると言う
ことを、あて人は知らぬのであつた。

ちよう ちよう はた はた。

はた はた ちよう……。

箴おさを流れるように、手もとにくり寄せられる糸が、動かなくなつ
た。引いても扱こいても通らぬ。箴の齒が幾枚もこぼ 毀れて、糸筋の上

にかかつて居るのが見える。

郎女は、溜め息をついた。た い き乳母に問うても、知るまい。女たちを起して聞いた所で、滑らかに動かすことはえすまい。

どうしたら、よいのだろう。

姫ははじめて、顔へ偏つてかかつて来る髪の毛のうるささを感じた。

箒の櫛目を覗いて見た。くしめ梭もはたいて見た。

ああ、何時になつたら、したてた衣を、ころもお肌へふくよかにお貸

し申すことが出来よう。

もう外の叢で鳴き出した、くさむら蟋蟀の声を、こおろぎ瞬間思い浮べて居た。

どれ、およこし遊ばされ。こう直せば、動かぬこともおざるま

い——。

どうやら聞いた気のする声が、機の外にした。

あて人の姫は、何処から来た人とも疑わなかった。唯、そうした好意ある人を、予想して居た時なので、

見てもれ。

機をおりた。

女は尼であつた。髪を切つて尼そぎにした女は、其も二三度は見かけたことはあつたが、剃ていはつ髪した尼には会うたことのない姫であつた。

はた はた ちよう ちよう

元の通りの音が、整つて出て来た。

蓮の糸は、こう言う風では、織れるものではおざりませぬ。も

つと寄つて御覧じ——。これこう——おわかりかえ。

当麻語部姥うばの声である。だが、そんなことは、郎女の心には、問題でもなかつた。

おわかりなさるかえ。これこう——。

姫の心は、こだまの如く聴きこくなつて居た。此才伎てわざの経緯ゆきたては、すぐ呑み込まれた。

織つてごろうじませ。

姫が、高機に代つて入ると、尼は機陰に身を倚よせて立つ。

はた はた ゆら ゆら。

音までが、変つて澄み上つた。

女鳥めとりの わがおおきみの織おろす機。誰たが為たねろかも——、御存じ

及びでおざりましようのう。昔、こう、機殿の櫓まじからのぞきこ
うで、問われたお方様がおざりましたつけ。

——その時、その貴い女によしよう性がの、

たか行くや隼はやぶさわけ別の御被服料みおすいがね——そうお答えなされたとのう。

この中申じゆうし上げた滋賀津彦は、やはり隼別でもおざりました。

天若日子あめわかひこでもおざりました。天てんの日に矢ひを射かける——。併し、

極みなく美しいお人でおざりましたがよ。截きりはたり、ちよう

ちよう。それ——、早く織らねば、やがて、岩いわどこ牀の凍る冷い

冬がまいりますよ——。

郎女は、ふつと覚めた。あぐね果てて、機の上にとろとろとした
間の夢だったのである。だが、梭をとり直して見ると、

はた はた ゆら ゆら。ゆら ゆら はたた。

美しい織物が、箴の目からほとぼし迸る。

はた はた ゆら ゆら。

思いつめてまどろんでいる中に、郎女の智慧が、一つのしきみ闕を越えたのである。

十九

望ひとむらの夜の月が冴えて居た。若人たちは、今日、郎女の織りあげた
一はた反の上帛を、夜の更けるのも忘れて、見みはや讚して居た。

この月の光りを受けた美しさ。

かとり
 縑かとりのようで、韓織からおりのようで、——やっぱり、此より外にはない、清らかな上帛じや。

乳母も、遠くなつた眼をすがめながら、譬たとえようのない美しさと、ずつしりとした手あたりを、若い者のように楽しんで、撫でまわして居た。

二度目の機は、初めの日数の半なからであがつた。三反の上帛を織りあげて、姫の心には、新しい不安が頭をあげて来た。五反目を織りきると、機に上ることをやめた。そうして、日も夜も、針を動した。

長月の空は、三日の月のほのめき出したのさえ、寒く眺められる。この夜寒に、倭人の肩の白さを思うだけでも、堪えられなかつた。

裁ち縫うわざは、あて人の子のする事ではなかつた。唯、他人の手に触れさせたくない。こう思う心から、解いては縫い、縫うてはほどきした。現し世の幾人にも当る大きなお身に合う衣を、縫うすべを知らなかつた。せつかく織り上げた上帛を、裁つたり截つたり、段々布は狭くなつて行く。

女たちも、唯姫の手わざを見て居るほかはなかつた。何を縫うものとも考え当らぬ囁きに、日を暮すばかりである。

其上、日に増し、外は冷えて来る。人々は一日も早く、奈良の御館に帰ることを願うばかりになつた。郎女は、暖かい昼、薄暗い廬の中で、うつとりとしていた。その時、語部の尼が歩み寄つて来るのを、又まざまざと見たのである。

何を思案遊ばす。壁代かべしろの様に縦横に裁ちついで、其まま身に纏まとうようになさる外はおざらぬ。それ、ここに紐ひもをつけて、肩の上でくりあわせれば、昼は衣になりましょう。紐を解き敷いて、折り返し被かぶれは、やがて夜の衾ふすまにもなります。天竺の行ぎょう人たちの著きる僧伽梨そうぎやりと言うのが、其でおざります。早くお縫いあそばされ。

だが、気がつくと、やはり昼の夢を見て居たのだ。裁ちきつた布を綴り合せて縫い初めると、二日もたたぬ間に、大きな一面の綴りの上帛はたが出来あがった。

郎女いらつめ様は、月ごろかかって、唯の壁代かべしろをお織りなされた。

あつたら 惜しやの。

はりが抜けたように、若人たちが声を落して言うて居る時、姫は悲しみながら、次の営みを考えて居た。

「これでは、あまり寒々としている。殯もがりの庭ひつぎの棺ひつぎにかけるひしきもの―喪氈―、とやら言うものと、見た目にかわりはあるまい。」

二十

もう、世の人の心は賢さかしくなり過ぎて居た。独り語りの物語りなどに、信しんをうちこんで聴く者のある筈はなかった。聞く人のない森の中などで、よく、つぶつぶと物言う者がある、と想着て近づ

くと、其が、語部の家の者だったなど言う話が、どの村でも、笑い咄ばなしのように言われるような世の中になって居た。たぎまのかたりおむな当麻語部の嫗なども、都の上じょうろう藤とうの、もの疑いせぬ清い心に、知る限りの事を語りかけようとした。だが、たちまち忽違つた氏の語部なるが故に、追のい退けられたのであつた。

そう言う聴きてを見あてた刹那せつなに、持った執心の深さ。その後、自身の家の中でも、又廬いおりどう堂どうに近い木立ちの陰でも、或は其処を見おろす山の上からでも、郎女に向つてする、ひとり語りは続けられて居た。

今年八月、当麻の氏人に縁深いお方が、めでたく世にお上りなされたあの時こそ、再己おのが世が来た、とほくそ笑みをした——が、

氏の神祭りにも、語部を請じて、神語りを語らそうともせられなかつた。ひきついであつた、勅使の参向の節にも、呼び出されて、当麻氏の古物語りを奏上せい、と仰せられるか、と思つて居た予あらましらまし期も、空頼みになつた。

此はもう、自身や、自身の祖おやたちが、長く覚え伝え、語りついで来た間、こうした事に行き逢おうとは、考えもつかなかつた時代ときよが来たのだ、と思つた瞬間、何もかも、見知らぬ世界に追放やらわれている気がして、唯驚くばかりであつた。娯たのしみを失いきつた語部の古婆は、もう飯を喰べても、味は失うてしまつた。水を飲んでも、口をついて、独り語りが嚙うわごと語ことのように出るばかりになつた。

秋深くなるにつれて、衰えの、目立って来た姥は、知る限りの物語りを、喋りつづけて死のう、と言う腹をきめた。そうして、郎女の耳に近い処をところをもとめて、さまよい歩くようになった。郎女は、奈良の家に送られたことのある、大唐の彩色の数々を思い出した。其を思いついたのは、夜であった。今から、横佩墻内へ馳けつけて、彩色を持って還れ、と命ぜられたのは、女の中に、唯一人残って居た長老である。ついしか、こんな言いつけをしたことのない郎女の、性急な命令に驚いて、女たちは復、何か事の起るのではないか、とおどおどして居た。だが、身狭乳母の計いで、長老は渋々、夜道を、奈良へ向って急いだ。

あくる日、絵具の届けられた時、姫の声ははなやいで、興奮はやりに響いた。

女たちの噂した所の、袈裟けさで謂えば、五十条の大衣だいえとも言ふべき、藕糸ぐうしの上帛はたの上に、郎女の目はじつとすわって居た。やがて筆は、愉たのしげにとり上げられた。線描すみがきなしに、うちつけに絵具を塗り進めた。美しい彩画たみえは、七色八色の虹のように、郎女の目の前に、輝き増して行く。

姫は、緑青を盛つて、層々うち重る楼閣伽藍がらんの屋根を表した。数多い柱や、廊の立ち続く姿が、目めかがや赫くばかり、朱で彩たみあげられた。むらむらと靨たなびくものは、紺青の雲である。紫雲は一筋長くとたなびいて、中央根本堂とも見える屋の上から、画きおろされた、

雲の上には金泥こんでいの光り輝く靄もやが、漂いはじめた。姫の命を搾るまでの念力が、筆のままに動いて居る。やがて金色こんじきの雲気は、次第に凝り成して、照り充ちた色身しきしん——現うつし世の人とも見えぬ尊い姿あらかわが顕れた。

郎女は唯、先の日見た、万法蔵院ゆうべの夕の幻を、筆に追うて居るばかりである。堂・塔・伽藍すべては、当麻のみ寺のありの姿であった。だが、彩画の上に湧き上った宮殿くうでん楼閣は、兜率とそつてんぐう天宮のたたずまいさながらであつた。しかも、其四十九重の宝宮の内院に現れた尊者の相好そうこうは、あの夕、近々と目に見たおもかげ倂おもかげびとの姿を、心にと覓めて描き顕したばかりであつた。

刀自とじ・若人たちは、一刻一刻、時の移るのも知らず、身ゆるぎも

せずに、姫の前に開かれて来る光りの霞に、唯見呆けて居るばかりであつた。

郎女が、筆をおいて、にこやかな笑いを、円く跪坐る此人々の背におとしながら、のどかに併し、音もなく、山田の廬堂を立ち去つた刹那、心づく者は一人もなかつたのである。まして、戸口に消える際に、ふりかえつた姫の輝くような頬のうえに、細く伝うもののあつたのを知る者の、ある訣はなかつた。

姫の倂びとに貸す為の衣に描いた絵様は、そのまま曼陀羅の相を具えて居たにしても、姫はその中に、唯一人の色身の幻を描いたに過ぎなかつた。併し、残された刀自・若人たちの、うち瞻る画面には、見る見る、数千地涌の菩薩の姿が、浮き出て来た。其は、

幾人の人々が、同時に見た、白日夢のたぐいかも知れぬ。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第4巻」小学館

1989（平成元）年4月1日初版第1刷発行

底本の親本：「折口信夫全集 第廿四巻」中央公論社

1967（昭和42）年10月25日発行

初出：「日本評論 第十四巻第一号〜三号」

1939（昭和14）年1月〜3月

初収単行本：「死者の書」青磁社

1943（昭和18）年9月

※誤植と組み体裁の誤りが疑われる箇所は、底本の親本を参照し

て修正しました。

入力：kompass

校正：米田進

2003年12月27日作成

2012年5月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

死者の書

折口信夫

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>